
厨式王國（ラス・キングダム）

しんどうみずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラス・キングダム
厨式王国

【Nコード】

N6293M

【作者名】

しんどうみずき

【あらすじ】

だれもが考えたことのある妄想が集められた国があった。

それは俗に「中二病」とよばれるイメージたちである。

そんな症例を集めた黒い歴史を、閲覧。

アメノナカデ（前書き）

心臓の弱い方、いまでも昔を思い出してはベットでジタバタする方などはお気を付けください。

アメノナカデ

『中二病とは、恥じらいを知らない自由なものたちによる愉快な妄想である。』

C h r i s Y S

「雨……か」

それは天から零れ堕ちる、空のナミダ。そして限りなく哀しい物語のハジマリ。

「クククー——さあ、オロカナ国民達よ、そのチカラを存分にふるうがよい。そして始まる伝説は永久の歴史に刻印されることだろう。」

脳裏にとどまる記憶こそが我々の存在理由であり、そうすることではか意義を得ないのだから」

ここはだれもが自由にユメを観る場所。

ルールも鎖もない、ただ己の技量だけが命綱となる。その源は想像力であり、遮るものはやなにもない。誰かによって考え出された抑圧のないイメージが体をなし、命を吹き込まれることによって今、新たなストーリーがはじまるのだ。

第壱話 アメノナカデ

彼は静かに降り始めた雨のしずくを頬に感じると、そっと空に向かって手を差し伸べた。

手のひらに生温かい水がしみわたる。なんとなく心地よくて、彼は目をつむった。

服がぬれてしまうとか、そういうことは考えていなかった。所詮、着衣などというものは薄すぎる防具にすぎないのだ。

なんなら裸でもかまわない。

本当に必要なのは外見や体面というあてにならないものではなく、己の体と剣だけなのだ。それと、自分に打ち勝てるだけのココロ。彼はそれで充分だと思っていた。

——余計なものは自分を弱くするだけだ。

彼は再び眼を開く。

口元を怪しくゆがませ、ナイキのスニーカーで踏み出した。水のしみこんだゴムの音がした。

学ランに身を包まれたその姿はどこからどうみても普通の学生にしか見えなかったが、それは偽りの外見にすぎず、その実態は別にあることを、一体どれほどのものが気づいていただろうか。

窓ガラスにぽつぽつと体当たりする雨滴を見て、おれは今朝やっていた天気予報を思い出した。

本職の天気予報士なのだろう中年のおじさんと、若いアナウンサーが天気図にうつる雲を指差してなにやらと解説をしていたが、そんなものは言われるまでもなく今日が雨であることを示していた。弱い低気圧が列島に近づいてきている。

そうすれば天気が崩れる。自明の理だ。その程度もわからないよう

では、いざという時に生き延びることはおろか、日常生活にも支障が出る。

世の中、バカばかりだ。

くだらない教師が教える授業にも、低俗な話ばかり盛り上がるアホどもにも辟易としていたが、学校という教育機関には行かざるを得ないのだ。なんという無駄な時間だろうか。

それでも政治家になって義務教育をなくすよりも、こうやって外の景色を眺めているほうが時間がかからなくていいので、とりあえず目立つようなこともせず無意味な高校生活を過ごしていた。

教科書通りの受け答えと、平均点を少し上回った成績をとってれば目をつけられることもない。

答えを見ながら宿題を解いた時のように、ちよくちよく間違えを挟むのは得意だった。問題から平均点を予想し、配点を予想するほうがずっと楽しいし、クラスメイト達の表情を観察していれば大体の点数はわかった。

勉強してない、とか言うやつのは勉強をしている。ただ4割は本当にしていない。

学校は人間観察の実験場であり、観察者であるおれはフラスコの外から対象物を観察している。それだけの話だった。

案の定、下駄箱の付近で傘がなくなつたむろしている同級生たちをしり目に、おれは校門を出た。

心配することもない。この雨はあと30分もすればやむ。

もちろんそんなことを親切に教えることもなかったが、待ち切れず鞆を傘にして駆けだしていく男どもを横目に見ていると自然に笑みがこぼれた。

そんなに早く帰ったところでもないだろうに。

たまには図書室でゆっくりと読書でもたしなむような余裕のあるやつはいないものか。聖書なんかも小説として読む分にはなかなか面白いのに。

まあ、いないだろうけど。

図書室の本なんてくだらない小説とあてにもならない参考書ばかりだ。

信用度はインターネットに氾濫するサイトと同じようなもの。内容はそれ以下。自由な発想がない分、それ以上にたちが悪い。

考えればわかること。いちいち調べる必要もない。

ほら、雨がやんだ。

雨雲は黒いまま風に流されている。まるで濁流に流されるかのよう

に。
そうやってしばらく理由もなく目まぐるしく変わっていく上空の景色を眺めていると、いつのまにか人通りがすっかりなくなってしまう。置いて、取り残されたのは閑散とした道路だけになっていた。どうということだろう。

久しぶりに感じた疑問を反芻していると、道の向こうから傘を持った学ラン姿の男の子がゆっくりと歩いてくるのが見えた。

年齢は同じくらいだろう。近所の高校の制服を着ている。何の変哲もない、ボタンと襟のついた黒い制服だった。

特に目立つような特徴もない、すれ違えば忘れてしまうような顔だ。彼のような人こそ犯罪を起こすべきなのかもしれない、と少しだけ思った。指名手配になっても、全国に似顔絵が張られたとしても、時効まで逃げ続けることができるだろう。まあ、その前に現行犯で捕まるのがオチだろうが。

あまり頭の下さそうな感じではなかったし。

だが、彼の周りから発せられるオーラだけは否めないものがあったのも事実だ。

誰もいない道端を二人の学生が交錯する。

まるでドラマのワンシーンのようにスローモーションで映し出される映像は、次の瞬間のための痛々しいほどの緊張感を醸し出していた。

それは、まさに刹那。

雨が落ちるよりも、桜の花びらが散るよりも早く、二人の握った長傘がまるで日本刀のように打ち交わされた。

それは現代に残った侍たちの闘い。

熱き魂と洗練された技術がぶつかり、そこに古より甦りし決闘が生まれる。

水しぶきをあげながら斬撃が空を切り、その軌跡の残像が消え失せないうちに新たな剣筋が死線を刻む。

彼は黒色の傘を思い切り横に払うと、そのままバックステップで間合いを取り呼吸を置いた。初めての言葉が何かを探るように発せられる。

「……あんた、何者だ？ その腕前は剣道を習っていたとかそういうレベルじゃねえ。幼少のころから達人に剣の師範を受けてきた――そんな感じの正確な剣だ。だが……それだけじゃねえ。わかるぜ、何か隠してるんだろ、他に」

平常の、なんてことない表情を装っているが、かなり動揺しているらしいことは震えていた声からもよくわかった。

「別に。意図的に隠しているわけじゃない。たった数合の打ち合いでそこまで見破れる君こそ、大したものじゃないか。その剣は独学かい？」

素人をはるかに超えた範疇ではあるが、誰かに教え込まれたという雰囲気ではなかった。おれのとは正反対に、乱暴で力任せな節がある。だが決して大ぶりなわけではない。スピードとパワーを兼ね備えた、ある意味邪道な技なのだ。

はつきり言って厄介だろう。

表情にこそ出すことはないが、非常に面倒くさい相手であることは確かだ。

おれはポーカーフエイスを保ちつつ問いかけてみる。

「どこで練習した？ まさか毎日筋肉トレーニングをしていたら自然に身についていた、とか言わないでくれよ。おれだってこれを会得するのに15年はかかったんだ。その間は地獄だったんだぜ？」

「そんなことはどうでもいい。あんたが何年修業を積んでいようが俺には関係のない話だ。それに、おしゃべりはあまり好きじゃない」

「そうか。見つめあうと素直におしゃべりできないと言うしな」
冗談を織り交ぜつつ、おれは相手から視線を外すことなく情報を集め続ける。

敵の戦略・戦術を知る上でいちばん簡単なのは相手から直接聞き出すことだ。自分の力をひらかしたがつているやつは多いので、ちよつと話術を織り交ぜてやればぺらぺらと手の内を明かしてくれる。ゆえに戦闘のあいまの会話は実に高度な心理戦となる。

剣を交わすことなく相手を知ることができるというのは、ずいぶんと戦況を有利にしてくれる。相手の手の内を見ながらババ抜きをするようなものだ。

カードさえわかってしまえば、恐れるものはなにもない。慎重に、かつ確実に勝負を決めるだけの話だ。

「無駄口はそれまででいい。俺はずつと強敵とやりあえる日を求めている。それが今日だった——たったそれだけの偶然だ」

「いや、偶然じゃないぜ」

とおれは言う。

「偶然じゃない。強者はお互いに運命によって惹かれあう。磁石みたいなもんだな、つまり」

「そうか」

と彼は言った。

傘を持つ右手に力がこもるのをおれは見逃さなかった。来る、と本能的に直感する。

斜め下から一直線に襲いかかってくる軌道を一瞬で読み切り、鼻先を先端が通り過ぎていくのをゆっくりと眺める。

……はずだった。

もしそれが本物の刀だったならば、何の問題もなかっただろう。何万回やったってかすり傷一つ当たらなかったはずだ。
だが。

「ツチ!？」

不運なことにおれたちが持っていたのは濡れた傘だった。

遠心力により表面についていた滴が先端に集められ、そして、まるでこらえきれなくなった雷が落ちるように軸の先から離れる。

引き寄せられるように飛んだそれは、瞼を閉じるよりも早く目を直撃した。

まずい。かなりまずい。

ヒトの脳が感覚器から受け取っている情報量は視覚が約8割を占めているといわれている。だから、目をつぶされるというのはほとんどの感覚を奪われたことと等しいのだ。

いわば状況は暗黒。それに対して向こうは隙だらけのおれを両目でしっかりとらえている。

二撃目はどこからくる？

最初の剣戟は右側へいなしした。普通に考えればそのまま折り返して右肩から袈裟切りをくらわせるところだろう。

だが、それはあくまで効率を重視した場合の話だ。

スピードを増し、相手が反応する前に攻撃を当てる。剣術においてはこれが最短のルートになる。

しかし目が使えない以上、相手は焦る必要なく落ち着いてトリッキ―な場所から一撃を食らわせればいいのだ。情性の受けなんてものはちよつと趣旨を変えてやればすぐにかい潜れてしまう。

防御できるのはせいぜい一回くらいのもだろう。

それさえ出来れば間合いを取りなおし、形勢を立て直すことができる。

考えろ。

常に最悪のパターンを想定し、回避する。それがおれの戦い方だ。だったらどうすればいい。何から逃げればいい。

この一連の思考が頭をよぎっていたのはほんの一瞬のことだった。耳元を、ぶんという風を切り裂く音が通過した後、おれは傘を構えた。チャンスは一回だけだ。これを取りこぼせば負け。ほんのわず

かなミスが招いた危機だった。

結果は風よりも早くやってきた。

「ぐっ……」

後ろにのけぞりながらも、おれはこぼれる笑みを抑えることができなかった。

「かはははは。――この勝負、おれの勝ちさ」

「……………」

みぞおちの前に構えられた傘は、完全に突きを受けていた。

「それにしても本当に凶悪な手を選択するとはねえ。普通に斬りかかられていたら今頃どっかの骨がイカレてたところだぜ」

「何故、わかった」

「なに？」

「とっさに突きを想定して防御するなどということは、常人じゃありえない」

「いや、まあ、勘ってやつだよ」

半分マジで、もう半分はウソだった。

「突く」という動作は戦闘のなかではあまり使われない。いったん手を引く必要があるし、なにより軌道が直線的で読まれやすいからだ。

ゆえに間合いの広い槍術ならともかく、近接戦ではほとんど見られないのだ。

剣道でも、面や胴が良く狙われるのはそのためである。

口には出さないが、綿密に計算をして叩き出した最悪の答えがこれだった。それも急所を的確に狙ってきた。心臓じゃなくてラッキーだったとしか言いようがない。

「それにしても、雨粒で目隠しをするなんてこと、よく思いついたもんだ。ちよつとだけ油断しちまったぜ」

「そんなこと。戦術の基礎のうちだ」

「へーえ。参考になるねえ」

おれはひゅう、と口笛を吹いた。雨のなかに乾いた音が響く。

「ひょっとして君はずっと剣ではなく傘で戦ってきたんじゃないの？　そうでないとこんな戦法を編み出すことはできないだろうし、なにより君の太刀筋は明らかに剣術のそれじゃない」

「そうか」

と彼はつぶやいたように見えた。なぜなら、唇を少し動かしたただけで何も音が伝わってこなかったから。

「名乗りがまだだったな。俺は傘刀流さんとうりゅうの唐沢総司だ——あんたは？」

「新堂瑞貴だ。何者かと言えば……そうだな、神ディバイン・エヴァンゲリストの伝道師と呼ばれてたこともあったかな」

「だいぶ前に話を聞いたことがある。終始お気楽な調子で相手を攪乱する天才だと」

「……うっそだ——」

なんだか無性に悲しくなって、おれは涙を流した。

冗談だと言ってくれよ、唐沢君。

「——だがその本性は人類有史の天才であるとも」

「そう、そっちそっち。それ、おれのことだから」

ひらひらと手を振って見せる。唐沢君は冷たい視線を向けていた。

……ノリが悪いなあ、まったく。

おれは気を取り直して正眼に傘を構えると、言った。

「雨が再び降り始める前に、この戦いを終わらせようか。あまり制服を汚したくはない」

「望むところだ」

おれはローファーで地面をえぐるようにして一気に跳躍し、回転しながら斜めに斬り伏せようとする。かれはそれを真っ向から受けると、反撃として顔面を横なぎにしようとした。

体をひねって攻撃をかわす。

「ふつ——はそれで君の傘はお陀仏になるところなんだけどなあ——やっぱりそう簡単にはいかないよね」

半円を描くようにして舞い戻ってきた剣戟は、おれが着地しようとしている足元をえぐりにかかる。持っていた傘を地面にぶっ刺して

タイミングをずらし、唐沢君の顔面に蹴りを食らわせようとするも、しゃがまれて当てることができない。

「ねえ」

そしてなぎ払われた傘を利用し、もう一度空中で回転しながら斬撃を浴びせる。無防備な背中に入るはずだったそれは、まるで攻撃を読んでいたかのようにすっと伸びてきた傘に封じられた。

「一口に天才と言ってもさあ」

地に足がつくと同時に連続で傘を繰り出す。

彼はそれを一分の隙もなく捌ききるとおれの傘をからめ取るようにして巻き込み、また突きを入れようとした。

「いろいろあるわけだよ」

的確に人体の急所を狙った一撃を指先で受け流す。首の横をすれすれで通過していく傘を見送りつつ、逆手に持ち直していた柄でタイミングをずらしながらクナイのような攻撃を浴びせる。

「様々な種類の天才が、さ」

逆手はあまり攻撃には適していない。

とくにリーチの長い傘ではメリットはほとんどないと言っていいだろう。

これはフェイクだ。

あえて隙を見せることで相手の反撃を誘い、さらにそれをかわすことでチャンスへとつなげる。

「おれはどんな天才だと思う？」

返事はなかった。

かわりに飛んできたのは中断からの横薙ぎ。利き手と逆の方向から仕留めようとするいやらしい技だ。

おれはそれをしゃがんで避けると、むき出しの弱点にむかって思い切り傘の先端をたたきつけた。

「つつ」

痛いだろうな。

弁慶ですら泣いたと言われる個所だ。

そこを強打されればだれていくらか防御が甘くなる。精神力でどうこうなる問題じゃない。人間の本能が痛んだ脛をかばえと指示するのだ。

「正解は——」

がら空きになった鳩尾をボクシングでいうアッパーの要領で下から突き上げる。肋骨と肋骨のあいだ、すべらせるようにして内臓の真上を殴りつけた。

柔らかい感触。

どんなに鍛え上げられた腹筋で覆っていようと関係ない。目と同じように、絶対に守りようのない部分が人体には存在しているのだから。

「全部でした」

彼——唐沢君は一瞬、重力から解放されたように宙を舞うとスローモーションな放物線を描いてアスファルトの地面に落ちて行った。ふう、と深呼吸をする。

これで終わっただろう。少年漫画の敵キャラのようにむくりと起き上がってパワーアップしたり、実はノーダメージでしたーとか言っ
て傷一つ付いていなかったり、倒したと思ったら必ず巨大化するちびっこたちのヒーローのような相手ではないのだから。

「あべし、とか、ひでぶ、とか効果音をつけてやられてくれると盛り上がるんだけどな」

野暮な趣味だ、とは自覚している。

それでも相手の手の内を全部さらけ出させてからゆっくりとそれらを蹂躪していく快感にはあらがえないのだ。どうせ勝つなら残酷に、そして完膚なきまでに打ちのめしてやりたい。

おれは気を失っている唐沢君の脈を測る。

まあ、生きているみたいだ。

おそらくは骨の一本や二本は折れているだろうが、そこまではおれの知ったこっちゃない。

鳩尾は下手をすると死にもいたるという。三途の川を渡らなくて済

んだのはまあ幸運なのだろう。

ちょうど水溜りの真上に落ちてしまったせいで唐沢君の学生服はびちよびちよになってしまっている。かれが目覚ますときには敗北による悔しさのせいで雨にあたりたがるだろうが、残念なことに雨雲はまるでジェット気流に流されるようにして散っていくところだった。

まぶしい太陽が雲の切れ間から顔をのぞかせている。

この調子なら10分ほどで虹が現れるだろう。

虹の根元には宝物が隠されているという話を耳にしたことがある。だれかがそんな話を真に受けて瞳をキラキラ輝かせながらどこまでも走り続けているのかもしれない。

敵としてはやや小物だった彼だが、戦闘はそれなりに楽しかった。ピンチを味わったのはどれくらい久しぶりだったろうか。油断大敵、その教訓を改めて感じさせられる出会いだった。

……と感慨に浸っていたところへ、晴れ間だというのに水を差すような裂け目が空を二つに割った。まるでモーゼが海を割ったように、よく目を凝らすとそのなかからわらわらと虫のような異形の物体が湧き出してくる。

それらは一直線にこちらへ向かっているようだった。

人間サイズのイモ虫と言ったところか。

目をそむけたくなるような原色のけばけばしい色をしている。あのままつぶせば当分絵の具には困らないだろう。

それらは後からあとから水のようにあふれ出てくる。地面に落ちては体が裂け、体液のとび散るさまをぼんやりと観察していたのだがやがて死体の山がうず高くなっていくにつれて何匹か生きたまま道路を這ってくるイモ虫が出てきた。

コンクリートの上を異様に大きなイモ虫が進んでいく光景は、どこかにゴジラが出てきてもよさそうなくらい普通じゃなかった。

「……気持ちわる」

虫はあまり好きじゃない。

絵の具のチューブから生まれたような原色のけばけばしい姿のイモ虫たちは何を目的にしているのかわからないまま這っているようにも見えた。

おれは気絶している唐沢君の傘を借りてイモ虫をつついてみた。

地球上の生物はほとんど把握しているから、こいつらは少なくとも新種だろうということはわかる。それに食物連鎖の関係からして、こいつらは明らかに捕食される側だ。サイズこそ人間並みだが、知能も運動神経もありそうにない。要はいろんな動物のえさだ。

まずおれたちが食べられることはないだろうということで、おれはイモ虫たちをつついてみたり、目の前を横切ってみたり、唐沢君を投げつけてみたりした。

ゲルのうえに着地したみたいにな、唐沢君は巨大イモ虫の背中に安置された。

つづいた時の感触はゼラチンを入れすぎたゼリーのように気持ち悪かったから、さぞかしよい夢を見ていることだろう、きっと。

それにしても、とおれは思う。

こいつらはどうして急に空から降ってきたりしたんだろうか。それ以前に、どこから何のために来たのだろうか。

全く見当がつかない。

人間に危害を加えるつもりではないだろうが、それにしても不気味だ。

知能がないかのようにまっすぐ進み、道を埋め尽くすように行進している様はどこか遠い星で撮影されたもののようにな現実的だった。その時、おれは先頭のイモ虫が急にのたうちまわり、ぐったりして動かなくなったのを見た。

何か変なものでも食べたか、急に心不全を起こしたかのような死にかただった。

「――まさか」

ふと、一つの可能性が思い浮かぶ。

おれは急いで振り返るとイモ虫たちの目と思しき半透明の器官を確認した。そのなかでは皮膚と同じ色の体液がしきりに流動している。まるで血液が逆流しているみたいだ。

「やばい、やばい、やばい」

おれは一目散に逃げ出した。

傘だけでどうにかなる問題じゃなかったのだ。

これから街を襲うであろうパニックに備えて、おれはとにかく背を向けて走った。イモ虫たちの群れの中に置き去りにしてきた唐沢君のことが少しだけ頭をよぎったが、猛スピードで突撃してきたモスラに食べられてどこかへ消えてしまった。

アメノナカデ（後書き）

どなたかタイトルの「ラス」という意味を教えてください。
なんとなく語呂で決めてしまいました。

蟲（前書き）

遅くなりました。

蟲

逃げる。

武器を用意するために。

使用によつては傘も強力な武器となることは確かだ。

しかしそれ以上に強力で、しかもこの危機的な局面に向いた武器があるのもまた事実。

「あれはやばいって……」

走りながら考える。

おれは長距離走においても天才なのだ。息を吸うようにして走り続けることができた。

何を用意すればいいだろうか？

「殺虫剤……ゴキブリホイホイ……食虫植物……火炎放射気……そんなもんねえか」

生物が自分の意思を失いながらも生かされている状態。傀儡^{かいらい}。

何か強いショックを受けて廃人同然になっているとか、認知症が進んでほとんど自我を失いかけているとか、そういうことでなければ心当たりは一つしかない。

それにしても、イモ虫にも認知症があるのだろうか？

老いるころにはとくに成虫に変態しているだろうから、老人というのは羽根の生えた昆虫といったところか。

「寄生虫のパターンからして、あれは誰かに食べられるのを期待しているわけではなさそうだった」

余計なことを考える脳と、真面目なことを考える脳を分離させることくらいわけもない。器用さにかけてはだれにも負けない自信があった。

「だとすればあの後は体が破裂するなり、誰かにかみつくなり——もしくは、もっと凶悪なやつが羽化して次の産卵場所を探すか」

寄生虫^{パラサイト}たちは宿主^{しゅくしゅ}に寄生することによって生きている。

その種類は多岐に及ぶが……イモ虫に寄生するとなると、考えられるのはこの世界でいうところのハチの一種だ。かれらはイモ虫の体内に卵をうみつけ、幼虫はその体を食い破って出てくる。このように宿主を食い散らかしてしまう種類を「捕食寄生」と呼ぶ。

これらはあまり一般的ではない。

なぜなら、寄生するものたちにとって住処となる宿主が死んでしまうのは非常に都合が悪いからだ。いわば自分でマイホームに火をつけてしまうようなものである。

中には食物連鎖を利用しわざと捕食されることで目的の宿主に寄生する手の込んだ種類もいる。

たとえばカタツムリに寄生しコントロールすることで、わざと鳥などに食べられやすい場所に誘導する。そこにカタツムリ的心思はなく、ただ操られるがままの存在と化しているのだ。そして寄生虫はぬけぬけと本来の目的である鳥に寄生し、糞のなかに幼虫を混ぜることで再び糞を食べたカタツムリに寄生することができる——というサイクルを繰り返すのである。

賢いものだ。実に賢い。

さらに特筆すべきはその様相だ。

寄生されたカタツムリの目はまるで脈打つように鼓動し、今にも破裂しそうなくらいに体液が流動しているのだ。まさに狂気である。操られるというのはあまりにも残酷な行為で、戦慄する。

あのイモ虫たちの瞳は、それにそっくりだったのだ。

「おそらくは……何かが出てくる。とてつもなく凶暴なやつらが」先頭でのたれ死んだイモ虫の最期は明らかに普通じゃなかった。あの死に方はおそらく意図的にもたらされたものだ。となれば考えられるのは――。

「うわあああああ！」

どこかで悲鳴が上がった。

唐沢君の声に似ているような気もしたが、彼のことはさっぱり記憶から除外することにした。後ろばかり振り返っては進むことは

できない。

大通りに出ると、たくさんの人々がなんの恐怖も持ち合わせず日常の上を行きかっていた。

買い物帰りの主婦も放課後でうかれている学生たちも、数時間もすれば悲鳴をあげて逃げ惑っていることだろう。せめて命だけは助かるように神に祈っておこう。アーメン。

林立するビルのせいではっきりとさらに空いた黒い穴は見ることもできない。そこからは今も生ける屍と化したゾンビのようなイモ虫たちが湧いている。

おれは一直線に自宅を目指して走っていた。

とりあえず屋内は無事だろう。外は近いうちに巨大な虫の飛び交う地獄絵図へと変貌を遂げるだろうが。

ガラスやなんやを壊して侵入してくるのは映画のなかだけだ。虫はガラスにぶつかって死ぬ宿命と決まっているのだから。

そうなると誘蛾灯なんかも効果的かもしれない。

両親は長いことおれを置いて海外に行っているから、現在は一軒家に一人で住んでいるという理想的な環境が成立している。籠城するにはぴったりだし、なにより大騒ぎする足手まといが減るのはうれしい限りだった。

二階建ての青い屋根をした自宅に戻ると、おれは真っ先にテレビをつけた。

はやければそろそろ巨大昆虫の話題を嗅ぎつけた局があるかもしれない。くるくるとチャンネルを変えて探してみたが、それらしい番組はやっていなかったのでパソコンを使うことにした。

速報性でいえばパソコンを使ったメディアのほうがずっとすぐれている。嘘でもなんでも書きこめてしまうから信ぴょう性は薄いけど、街中で巨大イモ虫が氾濫しているなんてダイレクトなデマを流すような偶然はまず起こり得ない。

「えーと……」

自分で作った検索エンジンにキーワードを入れ、検索する。

検索結果はほとんど表示されなかったが、つい数分前に建てられたスレッドにそれらしき言葉が見つかったので経過を見守ることにした。

書き込みはほとんどが小馬鹿にしたような発言ばかりでそれほど勢いはなかったが、時間がたつにつれて爆発的に投稿件数が増えてきた。ニュースで放送されるのも時間の問題だろうということでおれはパソコンの前を離れ、自室のベッドに横たわった。

枕はゲルマニウムの入った低反発のやつだ。どこかの通販で買ったおまけで付いてきたものらしいのだが、使い心地がいいので胡散臭い効果はともかく枕としては重宝していた。

物思いにふけるときはベッドに身を任せて目をつぶっているとよく集中できる。しばしばそのまま寝てしまうのが欠点だが、その時は夢のなかで考えればいいだけの話だ。

「最悪の想定」

地球が減じる。それはやりすぎだ。自衛隊だって出てくるだろうし、悪ければアメリカあたりが核でもほうりこんで事態が拡散しないうちに収束させようとするかもしれない。

もっと現実的に。

街一個くらいは食いつくされるだろうか。それもないだろう。いくら数が多いといっても人間だって黙って捕食されるほど甘くはない。馬鹿は多いが、本能だけは信用できる能力だ。

イモ虫は人間サイズだった。

そしてここに生のイモ虫はいない。変わりに卵をうみつけられる生物が必要だ。

大きさも同じくらいで、栄養がありそうで、そしてたくさん生息していること。

ヒトは完ぺきな対象だ。これ以上ないくらいに条件が整ってしまっている。皮肉なことに。

おれはリビングに戻るとニュース番組を探した。どこもかしこも突

如として空の割れ目から降ってきたイモ虫たちのことを報道していた。さらにいくつかのカメラは空を舞うハチのような生物をも映し出していた。

獰猛そうな大きな口に、体長の倍はあろうかという透明な四枚の羽根が印象的だった。ハチとトンボを掛け合わせたような姿だ。胴体は漆黒を思わせるように黒く、夜になったら闇に溶け込んでしまいそう。カメラの前をかなり高速で横切っていく。

イモ虫よりも体は小さいが、それでも小学生くらいの大きさはあり、人間にとっては十分恐怖の対象となる気持ち悪さを兼ね備えていた。アナウンサーが絶叫に近いような声で現場をレポートしていたが、本質からはかけ離れていた。それよりも、早くヘリコプターをどけたほうがいいだろう。寄生虫がプロペラに引っかけた^{バラサイト}墜落しかねない。なにしろ大きさが大きすぎるから、一匹が気まぐれに突撃しただけでも大惨事だ。

マスコミの意義は報道にある。

はやいところ災害救助しかしたことのない自衛隊を出動させたほうがいいと政府に催促することだ。世論が大きくなれば国はそれを放置することができない。命の危険が出てきたとなればなおさらだ。現場の周辺には物好きなヤジ馬たちが群がり、しきりに叫んだりイモ虫の死体を覗き込んだりしていた。

この後の悲劇はまあ、語るほどでもない。

空から降りてきた寄生虫の一匹が野次馬の一人をかつさらい、さんざん引きずりまわしたうえでかぶりついたのだ。おそらくそうやって数日間は栄養をため込んだ上で産卵するのだろう。猶予は一週間くらいか。

テレビ放送の映像は突然打ち切られ、スタジオに集められたアナウンサーや評論家たちが啞然としたまま愚にもつかない予想をひらかしていた。

「これは宇宙人の侵略に違いありません。あの生物は兵器であり、道端に転がっているのはそれらを運搬するための乗り物です」

「いや、某国の核実験の結果、突然変異で出現した個体でしょう」

「ゴミ問題がすべての原因です」

「どうして日本なんですか？ 韓国じゃだめなん——」
などなど。

普段からとにかく万民受けするための意見を述べているようなやつらが異常事態に対応できるはずもなく、どこもかしこも大混乱の議論ともつかない憶測を述べていた。

そういえば、こういう場合はどの大臣が対応するべきなんだろうか。国民が襲われているのだから、防衛省が出てくるのが一番妥当のようにも思えたが、きつと各省庁が責任を押し付けあって一向に決まらないのだろう。

いきなり宙から現れる寄生虫に対策を思いつけるような人材は、まず大臣クラスにはいない。

そもそも考えたこともなかっただろう。それが普通だ。

大真面目にUFOの研究をしている機関を設置するくらいの柔軟性がないと、不測の事件には対応できない。

その夜、非常事態宣言が発令された。

「ああ、うん、大丈夫だから」

親からの国際電話を切ると、おれは大きくため息をついた。心配なら海外なんて行かなければいいのに。

幸いなことに寄生虫は夜行性ではないようで夜の間は一時の平穏を保つことができた。

テレビでは夜中だというのに首相が記者会見を開き、各局は番組編成を大幅に変更してその会見を中継していた。

だれの責任でもないものを押し付けられた首相はたまったものではないだろう。額には玉のような汗が浮かび、その頼りなさが際立っていた。

「えー、このたびは突然、未確認生物が日本国内に出現し、尊い人命も失われてしまいました——」

と長々述べたうえで首相は、自衛隊の出動はいつでもできるようにしておくと言った。

人が死んでいるのだから早急に軍隊を出すべきなのだが、日本という国の特性上、武力の行使はなるべくひかえなければならぬのだ。とくに火器の使用は最大の回避事項となっている。

警察官が威嚇射撃をしただけで何枚も書類を書かされ、そのたびマスコミに報道されるくらいだ。

学校からも連絡網が回ってきて休校だと伝えられた。

おれにその用件を伝えた生徒がやけに浮かれた口調だったのは学校が休みになっただけではないだろう。

平和になりすぎると、とにかく刺激を求めたくなるものなのだ。

朝になるとどこからわいてきたのかやつれた顔をした若者たちが街を徘徊していた。しきりに上空を見上げ、何かを探しているようだった。

あ、と一人が指差した方向には起きたばかりで腹ペコの寄生虫が餌を探して飛んでいた。

そのとたん一斉に大声を出して騒ぎ始める。……どこまで頭が悪いのだろう。

案の定、カメラを片手に写真を撮りまくっていた一人が道端に引きずり倒され、無残にも集まってきた寄生虫たちによって余すところなく食べられてしまった。

若者たちは悲鳴ともつかない声を響かせながら近くにあったビルに逃げ込もうとして、初めて自動ドアが開かないことに気付いた。どこのビルも侵入を防ぐために鍵をかけてあるのだ。

最期まで必死にガラスを割ろうと蹴ったり殴ったりしていたが、正面玄関のガラスがそれほど脆いわけもなく、音に反応してやってきた寄生虫の群れに取り込まれやがて悲鳴は聞こえなくなった。

どうやら彼らは音にも反応するらしい。

それがわかっただけでも、彼らの死は無駄ではなかったようだ。

それ以外、街に人影はなかった。どこの家もカーテンを閉め、まる

で無人であるかのように静かだ。

「……さて、と」

おれは重い腰をあげると、家のなかをあさり始めた。作業には丸一日くらいかかるだろうがどうせ家のなかは安全なのだ、ゆっくりやればいい。

その日はテレビ番組がうるささを増しただけで寄生虫の占拠する街はとても静かだった。

明け方。

おれは道路の真ん中で大の字になって寝転がっていた。

目の前には色とりどりの模造紙と改造したコンデンサーにつながれた銅線が張り巡らせてある。それと電池式のラジカセを置いて、準備は完了だった。

銅線にはかなりの高電圧が流れている。おれでも触ったら危ないだろう。

念のためにライターとスプレー缶を握りしめて、おれはラジカセのスイッチを入れた。

時間さえあれば自前でギターを弾きたいところだったのだが、あいにくそこまでの設備は整っていなかった。スピーカーから大音量で英語の歌詞が流れ始める。耳が痛くなる程のロックだ。はっきりいって何を叫んでいるのか全く分からない。

「さあ、いらっしやい」

反応はすぐに表れた。

爆音を聞きつけた寄生虫が一直線に音源に突っ込み、銅線に焼き切られて死んだ。

蛍光灯に誘われた蛾が太陽に近づきすぎたイカロスのように落ちていくみたいだった。

さらに一匹、二匹と罠にかけられては儚い命を落としていき、山のような死体が瞬く間に出来上がった。まるで空から落ちてきたときのイモ虫のようなありさまで、なんだか皮肉な光景だった。

おれは用意してあった着火剤を寄生虫の上に振りまくと、ライターで火をつける。瞬く間にその山は黒こげになり、残った灰は風に流されていった。

もうここは用済みだ。

おれはライターとスプレー缶だけを持って次の場所へ向かう。

これと同じ仕組みの罠がラジカセの電源を入れられるのを待っているのだ。一度機能し始めた罠は自動的に発動し続ける。寄生虫の死体の重みで壊れない限り、効果を発揮し続けてくれるだろう。

百メートルほど離れた次の地点にむかう。そこではヤナーチェクのシンフォニエッタを流すつもりだった。せめて寄生虫たちに話題の曲を聞かせてやろうと思ったのだ。

誰もいない道路は心地よくて、足取りも軽くスキップしながら交差点を渡ろうとしたとき、背後に嫌な気配を感じて振り返った。

……なにもいない。

今度は振り返ったそばから背後に悪寒を覚える。

急いで後ろを確認するものの、またなんの姿もとらえることはできなかった。

「……なんだ？」

なにかがいる。

直観はそう告げていた。視覚だけが、まだ正体をつかみ切れていなかった。

「後ろだっ！」

どこからか飛んできた声と同時に、おれはライターとスプレーで即席の火炎放射気を作りだし、見えない羽音に向かって炎を浴びせかけた。

パリパリ、という乾いた音がして寄生虫が焼けていく。

燃え尽きるまでの様子を眺めながら、おれは声がしたほうに呼びかけた。

「誰だか知らないが、余計なおせっかいを焼いてくれなくてもよかったのに。あのくらいなら自分で何とかなったよ」

「それは悪かった。私はお前のためを思って注意してやったのだがな」

悪びれもなく謝った声は女性のものだった。

風鈴のように澄んだ、透き通るようでどこか芯のある声色をしていた。

「聞きなれない音楽を大音量で流している阿呆がいたから注意しに来てやったものを。今の惨状が目に入らんのか」

「だから虫退治をしてるのさ。このままじゃ危ないだろ？」

「そんなことはどうでもいい。近所迷惑だ。あのけたたましい機械を止めてくれ」

……ちよつと焦点がずれているような。

きれいな顔をしたその人は構わず続けた。

「それにしても何をやっているのだ、こんな時間に。まだよい子はぐっすりと眠っている時間帯だぞ。それにこの無駄に図体のでかい蜂はなんだ？ 特撮でもしているのか？」

「特撮だったら、思い切り『後ろだっ！！！』なんて叫んじゃったあんたは相当恥ずかしいね」

「そ、そんなにびっくりマークは多くなかったぞ！」

「さあ、どうだか」

おれは肩をすくめると、この不可解な人を放置して次の罠の設置にかかろうとした。

追いつがるように後ろから罵声が飛んでくる。

「どこにいくのだ！」

「そこ」

と指差した方向には電柱の間に何重にも張り巡らされた銅線と、シンフォニエッタのCDを入れたラジカセが置いてあった。

「あと、あんまり大声を出すと危ないから気をつけろよ」

「何を馬鹿なことを言っ……」

彼女はまだ何か言いたそうだったが、真正面から飛来した寄生虫に襲いかかれてしまった。

おれは抜き足でその場を去ることにする。

ゆっくり食事を楽しんでくださいな。

「ちよつと待てえい！」

驚いたことにその女性は生きていた——それも無傷で。

「なに人が襲われてるのにのうのうと逃げようとしてるんじゃない！」

「ほら、おれたち無関係だし」

「さっき助けてやった恩を忘れたのか！」

おれは大きくため息をついた。

どうやらあまり知能指数は高いほうではないらしい。それはともかくとして、おれは彼女の持っている神社などでよく見かける御札が気になっていた。

「それは？」

「護身用の札だ。^{ふだ}変質者がいたら使うつもりだったのだが、よもや昆虫ごときに消費させられるとは思ってもみなかった」

「ふうん」とおれは言った。「どのくらい持ってる、その札？」

「嫌な予感がしたから今日は多めに持ってきてる。あと20枚くらいだ」

「それ以外に身を守るすべは？」

「何もない。ただのか弱い少女だ」

自分で言っただけのけらくらいだから相当神経は図太いのだろう。美少女の印象が台無しだ。

彼女はラジカセをセットするおれの背中越しに矢継ぎ早に質問した。
「あの虫はなんなのさ。あんなに大きなのは聞いたことも見たこともないぞ」

「今しがた目撃したばかりだろう」

「うるさい。それにこのへんてこな仕掛けはなんだ？ 車が通れないじゃないか」

「人がいないんだから通るやつもないだろう。あんたの家にはテレビってもんがないのか」

「ない。うちの家系は厳しくてな、ロクでもない知識ばかりが散乱

しているからと許してもらえないのだ」

「へえ、変わってるな。神社の巫女さんでもやっているのか」

「その通りだが、はやいところ私の質問に答えてもらおうか」

おれは計画通りシンフォニエッタを流すと、地面に寝そべった。

「あんたも寝ておきな。あまり頭を高くしておくとは危険だ」

「……なにかいかがわしいことをするのはないだろうか？」

「いかがわしいことって何だ？」

「手箆めにするということだ。言わせるな恥ずかしい」

残念ながら恥じらいも持ち合わせてはいないらしい。おれとしては顔を赤らめて「やだ……そんな」とか言いながらうつむくシチュエーションを期待していたのだが、潔いほどに期待を裏切ってくれた。どうやら撫子なでしこの要素は顔だけにとどまっているようだ。

ジャージ姿の巫女なんて想像もしたくないのだが、目の前の女性は紺色のジャージに身を包んでいた。

少しの間彼女は何かを推し量るようにおれをじっと観察していたが、おれとしては欠片ほども興味を抱いてはいなかった。せめてテンプレート通りのキャラならよかったものを。

「まあ信頼してやろう」などと呟きながらおれの隣にあおむけに寝転がる。

空はどこまでも青く、今日という日がいつまでも晴れであることを示していた。クジラのような白雲の下、ゴマ粒みたいに群がっているのが寄生虫だろう。数はちつとも減っていないようだった。

おれは手短に事情を説明する。

彼女はさほど驚いた様子を見せなかったが、何やら心当たりがあるらしく、しきりに空の穴について聞きたがった。

「一昨日のこと、私はおそれ多くも先の副將軍——ではなかった、おそれ多くも神様に向かって灰をぶちまけてしまっただけ。それで怒った神様が天罰として空に穴をあけられたのだろう」

「ずいぶん器量の狭い神様だな」

「まあ、3度目ともなればお怒りになるのも無理はない」

仏の顔も3度まで、ならぬ神様の顔にも限度があるのだろう。それにしても本当にこいつは巫女としてやっていけるのだろうか。おれは日本の将来がひどく心配になった。これから先、何度天罰が下るかわかったものではない。

「わかった。要はあんたが原因なわけだから、生贄に差し出せばそれで事は解決するな」

「そ、そういうわけでもなかろう」

さっそく腕を掴んで全ての元凶を空にささげようとしたのだが、必死の抵抗にあって達成することはできなかった。

それに彼女――岡倉怜奈（後で知った）には責任を取ってもらわなければなるまい。

おれは般若の形相で岡倉に詰め寄ると、

「今すぐ神社に帰って謝ってこい」と脅迫した。

「な、なんで？」

「悪いことをしたら謝る。これは世界の基本だ！ おたんこなす！」

好きでもない虫と、嫌でも触れあわなければならない苦痛はこの阿呆が引き受けてくれるだろう。

「……そうか、私が悪いのか」

「そうだ」

「謝らなければならないのか」

「土下座しろ」

「巫女なのに」

「神様に灰をかけるようなやつが何をほざく」

「……………」

「……………」

岡倉は御札を手に神社へと帰って行った。寄生虫のほとんどは大音量で音楽を響かせるこちらの罠に引き寄せられているので、さほど障害もなく帰れることだろう。

おれはいくつか設置しておいた罠をすべて発動させると、虫よけスプレーをしてから空を見に出かけた。公園の滑り台の上で眺めてい

ると、空の亀裂はゆっくりと閉じていくところだった。
もちろんどの遊具にも人影はない。

もうじき寄生虫が駆除し終われば元気にはしゃぐ子供たちの姿が戻ってくるのだらう。公園もにぎやかな喧騒に包まれ、得体のしれない恐怖から解放される。

その時、岡倉と会った際に感じた嫌な気配が再び背筋を走った。

……どこだ？ どこにいる？

「面倒くさいこった」

おれは狙われやすい滑り台の上から飛び降りると、スプレー缶をシヤカシヤカと振りつつ公衆便所の陰に隠れた。

ライターがちゃんと着火することを確かめ、首だけを出してあたりを警戒する。

このとき、おれには一つの仮説があつた。それもかなりあくどい種類の仮説が。

できることなら思いすごしであつてほしい。だが、こういう悪い予感はいつだってよく当たるのだ。

「……さて、と」

知能勝負なら寄生虫程度に負けるはずはない。並の人間ならともかく、相手が悪かった。このおれを選んでしまったのが間違いなのだ。シャーロックホームズの目の前で犯罪を犯すようなものである。

おれはトイレのなかからトイレットペーパーを拝借してくると、それをのびきるまで転がした。地面にはまるで絨毯のようにトイレットペーパーが広がり、風を受けてははためいていた。

これで準備は整った。

おれは絨毯の中心から紙をどけて陣取ると、やたらめったらに歌を歌い始める。わざと背中が無防備になるようにして。

曲名はビートルズメンバーであるジョンレノンの イマジ imagine だ。
世界平和を歌ったこの曲は荒んだ現状にふさわしいだろう。

寄生虫にはおれが気の狂った少年のように見えている。トイレットペーパーをいきなり広げだし危険だらけで無人の街中で熱唱し始め

るやつがまともであるはずはない。きつとそう判断する。

岡倉と出会ったとき、他の寄生虫は蛾が蛍光灯に惹かれるようにおれの作ったトラップの虜になっていた。その中で一匹だけが、まるで全てを見透かしているかのようにおれを狙った。それかなり高度な戦術をつかって。

これはつまり、その個体が知能を持っていたという証拠になる。

本能のままに生きているようなやつらが、いったいどうして知能を持ったのか。昆虫が高い知能を持つなど普通はありえない。

だとすれば外部による要因が挙げられる。

何が彼らを変えたのか。生身の生物に人類が意図的に手を加えたとは考えにくい。今の技術では困難だし、何よりメリットがない。もし仮に寄生虫に知能を与えることができたとしても、あとで調べればすぐにめどをつけられてしまうからだ。高度な技術を有している研究施設なんて限られている。

人類でないとすれば、残っているのは自然界の他の生物。

「重複寄生……」

寄生虫に寄生する。それが重複寄生。ダブル・パラサイト

それがオリジナルの寄生虫に知能を与え、より高度な狩りを可能とさせたのだ。前にも述べたが基本的に寄生する側は宿主を生かしておいたほうが都合がいい。ならば知能を与え、より繁栄しやすくするように宿主を進化させることもありえない。

「りびんぐふおーとうでーい。やーは、つはははー」

おれは英語の歌詞を歌うことに関しても天才的なのだ。

なめらかな発音に聞き惚れている寄生虫が後ろから忍び寄っている気配がした。正体さえわかってしまえば気配を探ることくらい簡単だ。

ライオンのようにそつと忍び寄り、間合いに入ったところで一気にスピードアップする。

そこを振り向きざまの回転蹴りでたたき落とす。要は強大なハエミたいなものだ。たたけば気絶くらいはする。

おれはすぐさまティッシュペーパーの絨毯の範囲から飛び退くという間、イターで火をつけた。導火線のように燃え広がる火はあっという間に消えてしまったが、寄生虫の体に燃え移るには充分だった。

悲鳴のような声をあげてのたうちまわる。甲高い鳴き声だった。体が大きい分、全身が燃え尽きるまでには時間がかかるのだ。

乾いた胴体はやがて静かになった。

死んだふりくらいはできそうだが、さすがに燃やされては生きていないだろう。おれは慎重な足取りで炭になった死骸に近づくと、動かないのを確認して踏みつけた。

焦げた食パンをつぶしたような感触。

「……やったか」

ために生存フラグを立ててみたが復活することはなかった。さすがに消し済みになってはいくら知能があろうとも生き返れないらしい。

「なんだ！ 今の悲鳴は」

駆けつけてきたのはいまだに現状が把握できていないのか、わかっているけど理解できていないのか、どちらにせよ危機感に欠けた巫女さんがやってきたのだった。

ジャージ姿は相変わらずだが、両手にあふれるほどの御札を抱えている。

「あんたが招いた災厄の後始末をしていたところだ」

「誰かがさらわれたのか？」

「あんたよりも頭のいいやつを相手にしていた。魚を毎日食べるといい」

「……それは誰だ？」

「あの虫けらさ。寄生虫にひつついた寄生虫」

「……寄生虫の寄生虫？ 意味がわからない」

「――あんたもとりつかれたほうがいいんじゃないのか。少なくとも今の10倍くらいにはましになる」

「ははん。ただでさえ秀才の私の頭がこれ以上良くなったら地球が

滅びてしまうではないか」

「そうか。あんたは人生が楽しそうでいいな」

おれは特上の笑顔を向けてやると、足元の消し炭を粉々に砕く。死はどんなに知能が高かろうと平等に訪れるのだ。

「あの空の穴は閉じたみたいだぞ」

「そうか。土下座して謝ってきたかいたったというものだ」

うんうん、とうなずく岡倉の頭を無性にたたきたくなったが、女子をぶつぽどおれは落ちぶれてはいなかった。

ぐっと拳を握りしめてこらえる。

「放置しておいた罠のほうはどうなっていた？」とおれは訊いた。

そろそろラジカセの音楽が止まるころだ。音楽がなくなればあの罠に意味はなくなる。

「ああ、あれか。気持ち悪いくらい死体の山ができていたぞ。まるで地獄のようだったな」

「それならいい」

おそらく、寄生虫のほとんどは命を落としていることだろう。

本能を利用した罠ほど効果的なものはない。単純な生き物であればなおさらだ。

「あとは厄介なやつだけだ」

重複寄生している寄生虫がどれほどの割合でいるのかわからないが、おれよりも賢いはずがないから駆除をし終わるのも時間の問題だろう。

問題なのは目の前の間抜けや、虫が減ったと勘違いして出てくる一般人だ。

いくら数が減ったとはいえいまだ危険なことには変わらないのだ。

「人影はあったか？」

「なかった」

どうやらまだ時間は残されているらしい。

おれは岡倉の持っている御札に目をやる。

「どうやって使うんだ、それは」

「企業秘密だ」

「……仕方ない、東京湾に沈めるか。コンクリートに埋められるの
と手足を縛られるのと、どっちがいい？」

「じよ、冗談、冗談。そう怖い顔をするな」
かなり焦ったように岡倉は説明を始める。

「御札自体はいわば爆弾のようなもので、私が念じることによって
起爆する。やろうと思えばどれだけ離れていようと爆発させられる
し、時限式のようにも使えるぞ。それに長くはもたないが結界をは
ることもできる。——こんなところだな」

「簡潔な説明で助かった」

おれは深くうなずくと岡倉の手を引いて公園を出る。いつまでも同
じ場所に居座るのは危険だった。

何事もなく家まで連れて帰る途中、たくさんの死骸を見た。夏を過
ぎたセミのようにあつけなかった。

玄関に入ると鍵を閉め、テールを挟んで反対側の位置に座らせる。
「こんな家に私を連れ込んでどうするつもりだ。まだ日は明るいぞ」
「ちようどいい日和だ。全てを終わらせよう——夜が忍び寄る前に」

作戦名は神飛行機^{ペーパーウオーズ}作戦。あ、神と紙をかけてるからな、ここ大事。

そんなに感心した顔をするな照れる。
ん？ してない？ ごまかさなくてもいいぞ。

「阿呆！ 御札を紙飛行機にして飛ばすなどと罰当たりなことをで
きるはずがなろう！」

「もとはと言えば神様が引き起こしたことだ。そのくらいは許して
もらえ」

「……それもそうだが、しかし……」

「仏の顔は三度までだ。四度目はリセットして一から数えるだろう
よ」

「そんな適当な理由があるか」

岡倉は起こったように言うが、おれはテーブルに山積みになれている御札を一枚とると半分にして折り目をつけた。その様子をじっと見つめている岡倉は何も言わなかった。

「どうした？　怒らないのか？」

「巫女の眼前で堂々と御札の折り紙ができるやつがいるので呆れていたところだ」

岡倉はこれ見よがしにため息をついて見せた。そして、疲れたのようには頭を抱えて唸り始める。

「気が違えたか」

「寝違えたか、みたいな感じで言うのはやめてくれ。これ以上罰が当たると覚悟していただけた」

「よし、わかったら早速好きなように折ってくれ」

「紙飛行機だけでいいのか。なんなら鶴でも何でも作れるが」

「飛ばして当てなきゃいけないからな。空中に浮かべる形なら何でもいい」

「了解した」

そう言う岡倉は慣れた手つきで紙飛行機を折り始めた。すいすいと飛行機の軍隊が整列していく。

意外に器用なことだ、とおれが感心していると

「よくテストをこうやって風に乗せてどこか異国へ運んでもらっているからな」

といったずら気にはほほ笑んだのだった。

夕方。

まだ空の色は水色だったがすぐに赤へと移っていくことだろう。防犯セキュリティを突破するのに少々手間取ってしまったせいで、時間を食ってしまった。一人なら何の問題もなく平地を歩くようにしてビルに侵入できるのだが、今日はずいぶんと重たい足かせをはめられていたからだ。

ビニール袋のなかには御札で折った紙飛行機がまるでプレゼントのように詰め込んである。

これだけあれば充分だ。

「ここから飛ばすのか」

足かせが強い風に髪をなびかせながら言った。高層ビルの屋上ともなると、スカートではいられないくらいの風が常時吹いているのだ。ジャージ姿の足かせにはあまり関係ないようだが。

おれはよりも高いところにある黒い塊を指差して言った。

「あれが寄生虫だ。太陽を背にしながら獲物を探しているんだろう。夜になると巣に戻ってしまうから、日が暮れないうちに全部たたき落とす」

「私も紙飛行機の腕はなかなかのものだぞ」

「あんたはおれの合図で起爆をしてくれ。くれぐれも間違って袋の中身を吹きとばさないでくれよ」

「……むう」

ふくれっ面。

どうやら紙飛行機を飛ばしたかったらしい。下界を見下ろしながら投げる紙飛行機はまた格別なのだ。

風が全身に当たっては体を吹き飛ばそうとするのをこらえて、おれは宙に飛行機を放った。強風に流されるさまは、まるで川に流した笹船のようだ。

いくつかの気流にのまれながら飛行機は目標に接近する。ターゲット導かれるようにして寄生虫の背後に到着した瞬間おれは片手をあげた。

「爆破」

ポン、と情けない花火のような音がして、半身を持って行かれた寄生虫は建物の群れのなかへ落ちていった。

「……やったか？」

「わざわざ生存フラグを立てないでくれ。間違いなく駆除は成功した」

おれは両手に持った飛行機を次々に投下する。

ビルの狭間を複雑に流れていく空気は、ゴルフのパットのように読み切るのが難しい。それでもおれには手に取るようにして動きがわかる。

右。左。上昇して左。

「爆破」

「はい」

三連鎖。

あと何匹だろうか。

視認できるのはあと十数匹か。

そのとき、何の気なしに上空を見ると白い雲より先に急降下してくる寄生虫の姿があった。空が近く感じるのは気のせいではあるまい。後ろに向かって叫ぶ。

「結界！」

「ほいさ」

瞬間。

半透明の壁が五角形に配置した地面から伸びたかと思えば、屋上を囲うようにして防壁を張り巡らせる。それは勇猛にも突撃してきた寄生虫の体を真っ二つに裂き、内側に取り残された頭部だけを屋上に残して消えた。

「便利なものだな」

おれはつぶやいて、また紙飛行機を投げる。

夕焼けが沈むころ。最後の一匹が地上に堕ちた。

街に平和が戻ったと、テレビのなかでニュースキャスターが報道している。

おれは頬づえをつきながらそれを眺めていた。

「これで一件落着だな」

隣でせんべいをむさぼりながら岡倉が言う。

「あんたのせいだろうか」

「私は自分で自分の尻拭いをした。それでいいだろう」

「おれは無視か」

構わない。おれはスルーされることに関しても天才なのだ。

蟲（後書き）

やっと宿題が終わりましたー！

これで心おきなく小説が書ける……。

それにしても相変わらずへたくそで嫌になります。妄想をそのまま文章に変換できる機会があればいいのに。

あと、振り仮名（とくにカタカナ文字）はかなり適当につけてますので、あまり気になさらないでください。

読んでくださりありがとうございます。

テロリスト、襲撃

教室の窓からなんとなく空を見上げていると、白い雲がまるで空の模様を描き出しているかのように離れてはくつつき、綺麗な絵を作りだしていた。

青いキャンパスに白い絵の具。

どこまでも均一に広がっている大空の果ては地平線のかなたに消えて。

狭苦しい教室のことなど忘れてしまいそうになる。

数学の教師である山谷が教科書通りの公式を黒板に写している。ノートを真面目に取っているのは半分くらいだろうか。あとは眠っていたり、携帯をいじったりしてまるで授業を聞いてはいない。別にかまわない、とおれは思う。

テストの点さえ取れていれば、いくら授業を聞いていなくても成績は取れる。教師が教えることなんて、問題集の開設程度のレベルなのだ。要領がよければ学校に来なくても勉強はできる。

「新堂、ここの問題解いてみる」

ぼんやりとしていたのが目に付いたのだろう。

山谷はおれを指差すと、教科書の例題を黒板に回答するよう言った。

「はい」

ちよつとだけ教室中の視線がおれに集まる。普段から目立たないように過ごしているおかげで無関心の中心を維持することができていた。いじめにあうこともなく、友達がいないわけでもなく、かといってクラスの人気者になるわけでもなく。

絶妙な位置取りだ。

公式通りに問題を解き終え、席に戻る。

「よし、正解」

おれは再び窓の外を眺める作業に戻ると、一度だけ時計に目をやり、終業のチャイムが鳴るまでの時間を確認した。あと半分ほど。ここ

からが長いのだ。

そう思っていた。

それが長い長い一日の始まりになるとは、誰一人として想像していなかったのだから。

階下からけたたましい足音が聞こえてきたのは、授業が終わる十分ほど前のことだった。クラスにはもう終わりを待ち望む雰囲気蔓延して、みんながちらちらと時計を盗み見てはため息をついていた。

そんな中だったから、教室の外から聞こえてきた喧騒に注意を向けていたのは自然な成り行きだったろう。

黒服に身を包んだ男が銃を持って教室に入ってきたとき、まるで映画のワンシーンのように時間が止まった。ありえない非日常に出会ふと、思考がストップする。人はそれを時間が止まったと錯覚するのだ。

なにこれ？ と誰かが呟いた。

ドラマか何かの撮影だろうか。それとも避難訓練の一環か。

山谷の表情を見れば、そんな陳腐なものではないことは明確だった。あっけにとられた顔をしている。まるで幽霊に遭遇したような感じだ。

「静かにしろ。騒ぐな」

どすの利いた声。

どこかの教室から悲鳴が聞こえた。それと呼応するように女子が一斉に甲高い叫び声をあげる。

椅子を蹴飛ばすようにして立ち上がり、我先にと逃げ出そうとするクラスメイト達の目の前で、天井に向かって放たれた威嚇射撃の乾いた音が響いた。

「騒ぐんじゃねえ！」

続いてもう一発。

銃弾で蛍光灯が割れ、飛び散ったガラスが頭上に降り注ぐ。何人かが頬を切ってしまう、傷口からうっすらと血がにじんでいるのが見えた。

それから訪れる耳が痛くなるほどの静寂。

「カーテンを閉めろ。それから机を全部後ろにやるんだ。早くしろ」おれは欠伸をして、興味がないようなふりをしておきながら、内心では湧き上がる興奮を抑えきれないでいた。学校を襲撃するテロリスト！ それもかなり計画的だろうと推測できる。複数の、あるいはすべての教室を同時に占拠し、情報が外部に漏れないうちに遮断するその手際はお見事だ。

彼らはかなり手慣れた連中だ。おそらく人数もかなりいることだろう。

銃を向けられたおれたちに為す術があるはずもなく、男子連中が机を教室の後方に運び、教師の山谷は手足をロープで縛られたうえ口には猿ぐつわまでかまされてしまい、教室の隅にダルマのような姿で転がされていた。

ざまあみろ、とちょっとだけ思った。いつもは偉そうにしている教師が無抵抗に拘束されている図式はなかなか皮肉だったから。

それからおれたちは教室の中央に集められ、座らされた。

女子の何人かはすすり泣いていたが、テロリストの男はさして気をとめた様子もなく、インカムでしきりに連絡を取り合っている。その会話を聞くと、うちの学校はさしたる抵抗もなく制圧されたようだった。

防衛大でもなければ突然のテロリストの襲来に耐えられるところなんてあるまい。下手に抵抗して負傷するほうが問題だ。

男子のほうは拳の一つも握ることができず、面目もつぶされてどこか気まずい空気が流れていた。普段はうるさいくせに、いざという時にはあまりにも無力だ。危機感が薄いせいかな、恐怖と言う感情はまだ影を潜めているのが幸いだろう。

それよりも……気にかかるのは彼らの目的だ。

学校を丸々占拠してしまうという大掛かりなことをやってのけるのだから、相当大きな要求を送りつけるのが道理だ。だから金とか、そういった野暮なものを求めているわけではないはずだった。

あまりにもリスクが大きすぎるのだ。

下手に死人を出したりすれば機動隊の突入を早めるだけだし、逮捕された際のこととも考えられるべく罪状は軽いほうがいい。銃刀法違反と監禁。さしあたってはこれくらいだろうか。それほど重い罪にはならないだろう。

テロリストは通販で売っていそうな黒い覆面をかぶり、目だけを出して教室をにらんでいる。両手で抱え込むようにして持っている重厚感のあるそれはMP5だろう。マシンピストルとも呼ばれる、短い機関銃のことだ。

普通の拳銃と違ってかなり値が張るから、テロなどではあまり使われないはずなのだが。

……よほど自信があるということか。

全身は黒い服で覆われ、防弾チョッキを着込んでいるためか着膨れして実際の体格より大きく見える。機動性はあまりすぐれていないだろうが、生身で立ち向かうには強力すぎる装備だった。

「――よし、わかった」

黒服の男はそう言うのと、無線を切った。脅すように銃を構えながら、教室を見回り始める。

「おい、このクラスの生徒は全部で何人いる？」

そう尋ねたのは逃亡者がいないか確認するためだ。とっさに逃げられて、警察に駆け込まれでもしたら厄介だし、内部の様子を密告される恐れもある。

全ての人間を支配下に置いておきたいのは当然の反応だった。

「33人です」

そう答えたおれを教室中のクラスメイトの視線が貫いた。

このクラスの生徒は32人。そして、今日は一人の欠席者もいなかったのだから。

「本当か？」

動けなくされている山谷に向かってテロリストが問いかける。その後ろから、おれは睨みつけるような威嚇を送りつけていた。恐怖に怯えた山谷は自分の頭で考えることもせず、ただ大きく首を縦に振る。

一人ずつおれたちの人数を数え、何度か首をひねった後、テロリストはもう一度尋ねた。

「おい、本当に33人なんだろうな」

「はい」

「休みはいなかったのか」

「はい」

反応は早かった。

インカムにむかってどなりつけるように「一人だけいない！」と報告すると、今度はおれたちに向き直る。その両目は焦っているようにも、怒っているようにも見えた。

「誰がいない？」

「渡辺くんです」

どこにでもいそうな名前だが、偶然にもおれたちのクラスに渡辺くんは存在していない。――つまり、これは大ウソなのだ。隣に座っている谷繁くんはまるで宇宙人を観察しているかのような注意深さでおれを見つめているし、反対側の堀内さんは今にも泣きだしそうだ。

このウソがばれたら殺される。

余計なことを。何考えてんだ！

そんなことを口に出すわけにもいかず、おれは非難のまなざしを一身に受けることとなっていた。

テロリストは顔を近づけておれに質問する。声が震えていた。

「そいつがどこへ行ったかわかるか」

「教室にあなたが入ってきたとき、一目散に逃げて行きました」

「……くそったれ！」

そう、これは彼の過失ということになる。教室を一斉に占拠して身動きを取れなくさせるのが彼らの作戦だったなら、その包囲網をかいくぐって逃げ出した不安要素が校内をうろついているのは不都合極まりないのだ。

おれは黒服が動揺しているのを逃さず、たたみかけるように提案する。

「あの、おれ探すの手伝いしましょうか？ 変なことをしたやつので殺されちゃたまないし」

「いや……それは……ちょっと待ってろ」

男はそう言うが無線でなにやら本部と交渉し、しきりにうなずいていた。

おそらく学校の見取り図などは頭に入っているのだろうが、実際に学校で生活しているおれたちのほうが詳しいのは当然だし、隠れやすい場所なども把握している。

不慣れな環境でのガイドの存在は大きい。大げさかもしれないが、彼らにとってはアウエーなのだ。

「おまえだけはついてこい。残りはここでじっとしている。俺が帰ってきたときに少しでも不審な動きがあったり、誰かがなくなっていればこいつともう一人を殺す。いいな」

まるでライオンを前にしたウサギのようだ。

少しでも黒服の圧力から逃れようと、身をすくませて震えている。テロリストと一緒に教室を出る直前、おれは気付かれないようにウインクを送った。銃を持った男が一時的にせよいなくなる。これだけでも心理状況はかなり楽になるのだ。

「お前だったらどこに隠れる」

二人きりで無人の廊下を歩いていると、どういうわけだか親近感がわいてきた。

おれにとってもクラスメイトを人質に取られているのはつらい。この状況でのハッピーエンドはだれも傷つかずに助かることだ。怪我ならまだいいが、死んでしまっただけはシャレにならない。

なにしろ凶器は銃なのだ。ほんの少し当たり所が悪かっただけであつという間に天国への片道切符が手に入る。

「そうですね……たとえば図書室とか、トイレとか。あるいは隙をついて校庭なんかにもいるかもしれませんね。校門なんかは封鎖してあるんですか？」

さりげなく情報を聞き出そうとするものの、黒服もそこまで甘くはないようだった。

「トイレはどこだ」

と、はぐらかされてしまう。

実際は渡辺くんなどいないのだから、どこを探しても見つかるはずはない。

おれが黒服を教室から連れ出したのは彼の様子を逐一観察するためと、学校の状況を把握するためだ。それらしい場所を提示して連れまわし、なるべく多くの情報を収集する。

現代の戦いは火力ではなく、情報戦だ。

銃を有する相手に対して、こちらは素手だ。人数と地の利。それをどう活かせるかが勝敗を左右する。おれは横目で物陰を調べる黒服を見やると、ひそかにほくそえんだのだった。

うちの学校は校庭を囲むようにしてコの字状に校舎が建てられている。

体育館とプールは少し離れた場所にあり、そこへ行くためには校庭を横断しなければならない。テロリストたちが人質を体育館に集合させないのはそのためだろう。

銃を使わずに校庭の警備をすることは難しい。一人が逃げ出そうと試みればそれにつられて大勢の生徒が脱走しようとする可能性もある。そうなってしまうては近隣住民の目を気にせざるを得ない状況下、テロリストたちは撤退を余儀なくさせられるだろう。

教室に閉じ込めておくのは一見非効率のように思えて、意外と理に

かなった作戦なのだ。

教員室は昇降口のすぐそば、一階にある。真っ先に制圧されたのはここだろう。おそらく警備会社への連絡もさせてもらえなかったはずだ。

その上、教員のほとんどは授業に出払っていて、残っていた大人は少なかった。襲撃するには完璧なタイミングだ。

トイレと階段はコの字の角に配置しており、理科室や調理室は教室とは違う方角、つまり正面から見て右手側だ。音楽室や購買は左手側にある。三階建ての校舎は全てのカーテンが閉め切られ、外から内側がうかがえないようになっていた。

おれたちは最初、教室を出て左——つまり理科室の方面にむかって探索を始めた。

調理室や理科室のほうに武器になりうるものがたくさんある、とおれが言ったためだ。危険な薬品や包丁がしまわれているところに立て籠もりたくなるのは自然な心境だろう——という説得をして、黒服も納得したようだった。

ちなみに、図書室は音楽室側の一階にあり、窓から逃げ出すことは容易なのだがそのことは黙っておいた。

「……どこにもいないぞ」

いらだった様子で黒服がおれをなじる。

それはそうだ。架空の渡辺くんを見つけるよりもUFOを発見するほうがまだ簡単というものだ。

「ひよっとすると、もう逃げちゃったかもしれませんね」

おれたちは部活の備品などがしまわれている倉庫を調べていた。そこには体育の授業で使うとび箱や金属バットなどもしまわれている。気づかれないように縄跳びを抜き取ると、おれはバスケットボールの詰まったかごを調べる黒服に声をかけた。

「……渡辺くんはおれたちを置いて逃げ出すような卑怯者ですから、プライドを捨てた場所にいるかもしれませんね」

「プライド？」

「あれですよ——男子禁制の女子トイレ。」

「——お前たち、まだそんなことにこだわっているのか？」

呆れたような声。おれたちは男子トイレしか調べていなかった。

「まあ高校生ですし。そんな空恐ろしいことはできませんよ」

「そういうものか」

「個室だらけですしね。調べればすぐに見つかるでしょう」

おれとしては女子トイレに入ることくらいなんともないのだが、こは純情な男子高校生を演じることにする。

トイレの前に来ると、おれは黒服に道を譲った。目だけで嫌そうな表情を返してくる。

「お前はここで待っている。ちょっと調べてくる。逃げ出したらクラスメイトがどうなるかわかっているな？」

「もちろんですよ。おれもお通夜に出たくはありません」

笑顔で送り出すときの気分は、まるで新婚の奥さんだ。黒服が女子トイレの角に消えていったのを見て、後ろのポケットから隠しておいた縄跳びを取り出す。

安価で売っているゴム製のやつだが人の首を絞めるには十分な強度だ。

おれはそっと足音を殺して黒服の背後に忍び寄り、襲いかかるようにして縄跳びで首のまわりを覆うと、一息にしめあげた。

くぐもった悲鳴。

必死に縄をほどこうと抵抗するが、長すぎる銃が邪魔になって思うように身動きが取れず、やがてぐったりと気を失ってタイル張りの床に倒れこんだ。

死んではいけない。気を失った後、もう数分ほど気管を圧迫し続けないと人は死なないものなのだ。

今の状態はただの酸欠である。

防弾チョッキなどの服を脱がせ、武装を解除してから黒い覆面をはぎ取る。インカムを奪うことも忘れない。これが重要なのだ。

両手両足を縄跳びで縛り、口にはトイレットペーパーを詰め込んでその上から持っていたハンカチを巻きつける。鍵のかかる用具入れに気絶した元黒服を放りこむと、おれは無線を開いて渡辺くんを発見したと報告した。

「……ちゃんとおとなしくしていたようだな」

教室のなかにいる生徒たちは肩を震わせて怯えていた。テロリストと一緒に架空の渡辺くんを探しに行ったはずの新堂の姿はなく、銃を持った男だけが帰ってきたのだ。

なにをされるかわからない。

本能的な恐怖がすすり泣きの響く小さな教室に蔓延していた。命の危険を感じる恐怖が。

その様子がおかしくて、おれはつい笑い出してしまった。

「――なんてね」

覆面を取る。

ガスバーナーで溶かされた氷みたいに、張りつめた緊張が消えていく。どこからともなく安堵のため息が漏れた。

「何やってんだよお前。急に変なこと言いだしやがって。渡辺って誰だよ？」

緊張の糸がぷつぷつと切れてしまったためか力の抜けた風に神崎くんが笑いかけた。

おれは親指を立てて応える。

「とりあえずあの黒服をおびき出さないといけなかったからね。今は拘束してトイレにしまっておいたよ」

それより……と教室を見回す。

「誰も逃げてないよな」

「みんな怖くてそれどころじゃなかったの。新堂が馬鹿なことをするからみんな殺されちゃうんじゃないかって……ユカコなんてずっと大泣きしていたんだから」

気の強い黒崎さんが詰め寄る。

おれはごめん、と素直に謝った。女の子を泣かせていい正当な理由はプロポーズだけなのだ。

「みんな、歩けるか？」

クラスメイト達に尋ねる。キョトンとした表情の彼らに、おれはこう言い放った。

「これから奪還作戦を始める」

「新堂！　こちら第1班！　音楽室の解放に成功しました！」

「了解。インカムを本部に」

高校とはいえ、携帯電話くらい誰でも持ってきている。

テロリストたちのように無線で、というわけにはいかないが学生には学生なりの通信手段があるのだ。

続いて着信。

「こちら第2班。2B教室の制圧に成功！　けが人はゼロです！　引き続き2Aの鎮圧にかかります」

「了解。気をつけて」

並べられた学習机の上には戦利品のインカムが所狭しと置かれている。時々、定時報告をするために声色を装って異常なしと声を吹き込むのも忘れない。

黒板に描かれた学校の見取り図には制圧を意味するバツ印が次々に足されていき、着実に勢力を伸ばしていることを示していた。

「新堂、性格変わってない？」

クラス委員でしっかり者の白谷さんにはおれの補佐をお願いしている。刻一刻と変化する戦況を正確に把握するためだ。本部である教室にはおれと白谷さんの二人だけが残り、あとは対テロリスト戦に回している。

「そうかな？」

「そうだよ。いつもはこんなにイキイキしていないでしょ」

「今はしてる？」

「後ろを任せられるくらいには頼りがいがあるかな」

こんどは第3班からの連絡が入る。技術室が無人であることを確認したらしい。これで校舎の3階は全て支配下に置いたことになる。

敵の本陣は教員室であるから、気取られない範囲から徐々に陥落させていくのが作戦だった。

救出した教室にいる生徒をつかい、さらに大規模な作戦をとれるようになるのが強みだ。

最初の何回かさえ成功すれば、奪ったけん銃などで脅し、抵抗することなく制圧することができる。その何回かはおれが赤子の手をひねるように鎮圧したが、あとは防弾チョッキを着込んだクラスメイト達がうまくやってくれている。

訓練を積んだものだからこそ、銃を突きつけられると動けなくなるのだ。

後ろに金属バットを持った用心棒たちが控えているとなれば威圧感とは並大抵のものじゃない。

「本部より13号。様子はどうか」

「13号より本部。以上ない」

「本部より13号。了解」

こちらはテロリスト本部との通信。

何人かの声音を使い分けることくらいなんてことない。おれは物まねにおいても天才なのだ。

「それにしてもラッキードったわね。テレビ局のヘリや拡声器の音で喧騒が聞こえないなんて」

校門の周りはぐるっと機動隊とパトカーの群れに囲まれ、上空では何台かのヘリコプターがなんとか校舎の様子を映しだそうと懸命になっていた。

プロペラを回す断続的な破裂音が降り続いているため、多少の戦闘があったくらいではテロリストたちの耳にも届かない。安っぽい壁をつかっていて助かった。

「ひょっとしてこれも計算のうち？」

「まあね」

白谷さんに向かってウィンク。……ちょっとテンションが上がりすぎたか。

気分が高揚しているのは白谷さんも同じようで、クールな風を装っているが声が弾んでいるのを隠せてはいなかった。

警察の誰かが犯人と交渉している声が聞こえる。

まるで昼間にやっている刑事ドラマみたいだ。人質を解放しろ、だのお前たちは完全に包囲されている、だのと叫んでいる。内部で異変が起こっているのは勘づいていないらしかった。

「携帯があるなら警察に電話すればいいのに。そうすればすぐに解決するんじゃないの？」

白谷さんがそう尋ねる。電話などする気がないのはとくにわかっているのだ。

おれは彼女が黒板にチョークで新たな情報を書き込むを見ながら言う。

「教員が人質に取られているし、もし電話なんかしたら危ないからやめろって言われるだろ。おれたちの学校はおれたちが守る。それでいいじゃん」

白谷さんは微笑するだけで何も言わなかった。

そのまま順調に制圧は進み、やがて残すは1階のみとなったとき、おれはクラスメイト達に招集をかけた。続々と武器を手にした同級生が戻ってくる。誰一人として怪我をした者はいなかった。

「みんなご苦労さん」

「大したことないって。あいつら銃を向けたらすぐに降参するんだから」

得意げに神崎君が言う。野球部でがたいもいい彼は金属バットを片手に鼻の下を掻いた。

こちらが奪った銃は数十個に及ぶ。

誰も使い方は知らないのだが、とりあえず銃口を向けるだけでも充

分すぎる威嚇にはなる。中には銃マニアもいて、そいつは目を爛々と輝かせて実に楽しそうな表情をしていた。

「これで大部分を掌握したことになる。おれたちはこれから1階にある教員室を襲撃し、テロリストの確保を行う。その前にいくつかやっておくことがあるんだが……。他のテロリストはどうしてある？」

「柔道部が絞め技を決めて気絶させた。あいつらすげーよ」

「それから縄で縛ってがんにがらめにしてある。――ケンスケが妙に詳しかったけどな」

「そ、そういうわけじゃなくて……」

「仲居くんの性癖はよくわかった。ちなみにおれはあまり好きじゃない」

そう言うとおれは長いこと教室の隅で忘れ去られていた教師の山谷を運び、悪魔の笑みで問いかけた。

「ところで、テストのことなんですけど――」

びんぽんぽんぽーん。

間拔けな放送音が響く。

「放送室からお知らせです。只今、先生方との交渉をしております。条件は一つ。期末テストを良心的な難しさにしていただくことです。ややこしい方程式やスペルの長い英単語ではなく、ごくごく常識的な難易度にしていただけるのならあなたたちを救助したいと思います」

「なんだこれは!？」

無線から焦ったような声が発信される。

本部の人間はさぞかし驚いていることだろう。

「こちら13号……ぐああ!」

「どうした13号! 応答しろ!」

「7号、このくそガキ――ああああ!」

「おい、何があった!」

「だめです! もう持ちこたえられせんうわああ!」

「ぐはあっ!」

「ひでぶ!」

混乱と喧騒の演技はたった一人の口からメロディを奏でるようにしてあふれ出ていた。おれは両手に持ったトランシーバーに声を吹き込んでいく。

さも一斉に襲撃を受けているかのように。

「本部のみなさん、聞こえてますかあ? あなたたちは完全に包囲されています。いくつの銃口があなたたちを狙っていることでしょうか。少しでも変な動きをすれば蜂の巣ですよ。こっちは正当防衛ですから」

「……誰だ、貴様は」

「今足元で倒れている兵士さんの無線を使って会話しているのは、通りすがりの学生です。それより、くれぐれもその部屋を飛び出したりしないで下さいよ。おれたちは別に校長がどうなろうが知ったことではないので」

タイミングを計ったように天井に取り付けられたスピーカーから放送が入る。

「どうしますか? 助けるも助けられないも、あなたの反応次第ですよ。もし返事がイエスなら大声で叫んでください。それ以外なら放置します。答えは5秒でどうぞ。5、4、3……」

カウントダウンが終わる前に、朝礼でよく聞く声が教員室のなかからこだました。おれは人差し指を突き出して号令する。

「全員突撃!」

その瞬間、理科室の薬品をつかって作った即席の催涙弾を投げ込み、扉を固く閉める。ただ単に言ってみただけなのだ、要するに。ガスマスクではなく覆面をしていたのが間違이었다。相手が高校生だからといって油断していたのが運のつきなのだ。窓はもちろん閉め切っているだろう。

さほど広くもない教員室にいくつもの催涙弾が投げ込まれればあつという間にガスや化学物質が充満し、呼吸がたらくなってくる。目や鼻だつてただでは済まないはずだ。成分は空気よりも軽いものばかりだから、床に転がされている人質に被害は及ばない。

扉はつかえ棒で固定してあるからどんなに苦しくても出てくることは不可能だ。完全な詰み。

しばらく扉を開けようとしたり、懸命の抵抗を見せていたテロリストたちだったが、やがて息を引き取るように沈黙した。

「よっしゃあ！」

と誰かが歓声を上げる。それにつられて万歳の声があちこちで木霊し、まるで勝鬨のように廊下に響いた。おれは待機していたクラスメイト達とハイタッチをかわしながら教員室の閉じられた扉の前に来ると、つかえ棒を外し扉に耳を当てて中の様子をうかがう。

「……何もないか？」

おれは静かにうなづく。

その言葉がうかつだった。神崎くんが何のためらいもなく扉を開こうとしたとき、おれはかすかなうめき声のような声がしたのを聞き逃さなかった。

「いけない！」

「え？」

神崎くんの体をはじき飛ばすのと、乾いた銃声が生まれたのとは、ほとんど同時だった。

目を覚ました時、知らない天井が視界を覆っていた。

まわりには心配そうなクラスメイト達の顔が並んでいる。大きくもないベッドはおれを取り囲む連中でいっぱいだ。

「……心配かけさせやがって。最後の最後にこんなことになるなんて、どれだけ甘いんだか」

神崎くんが言う。泣き腫らしていたのか、彼の両目は真っ赤に充血

していた。

悪いことをしたな、と思う。

自分が傷つくのに耐えられる人間は多いが、他人が自分のせいで傷つくのに耐えることはもっと難しい。重過ぎる責任に押しつぶされそうになって、零れ落ちてきた言葉がその悪びれたものだっただけの話なのだ。

おれはゆっくり手を伸ばし、空をつかんだり放したりしてまだ自分が生きていることを実感する。いざとなれば三途の川だって泳いで渡れそうなくらい力強かった。

明るすぎる蛍光灯に向かってつぶやく。

「——ただいま」

「おかえりなさい」

31人の言葉が、合唱コーラスした。

天国では、黒い翼をもった天使が力なく堕ちていくのを見かけた。

テロリスト、襲撃（後書き）

これまた定番で申し訳ありません。

ちよつと山場の盛り上げが足りなかったかな……と反省する日々で
ございます。

薬品やなんかはいちおう見せかけの論理を適応していますが、間違っ
ている可能性も大いにあります。

そのあたりはご容赦ください。

墮天使少女（前書き）

今回は割とシリアスです。

墮天使少女

あるとき天上の世界で、一人の天使が叛乱を企てた罪によって討伐された。

純白の翼をもつ天使たちはその罪の証として、片方の翼を奪い、空を飛べないようにした。残ったもう片方の翼はどす黒い憎しみに染まり、堕ちていく朦朧とした意識のなかで天上を見つめる瞳は、復讐の焰で満ちていたという……。

辛いことに銃弾は急所をとらえることなく、わき腹の端をかすめていただけだったので、数日も安静にしていれば退院することができた。その間、クラスメイト達がかかるがわるお見舞いに来てくれたので退屈することはなかったが、それでも学校のある昼間はすることがなく、おれはもっぱら気絶していたときに垣間見た光景を反芻していた。

なにも死にかけていたわけではなかったのだろう。

もしかすると夢だったかもしれない。けれども妙に神々しい空間を波間に浮くようにして漂っていた記憶があるのだ。

あれが天国というものか。地獄で閻魔大王に遭わなかっただけマシ、という考え方もできるが。

「……墮天使」

天国にも戦争はあるらしい。神様も大変なものだ。

ぼろぼろの姿になって地上へ堕ちていった彼は今頃どうしているだろうか。片翼をもがれた蝶は飛ぶこともかなわない。運命は残酷なものだ。

「本当にいたんだな」

超能力の類には出会ったことがあるが、まさか天国までが存在するとは思っていなかった。そのうち怪物や悪魔と対面することもあるだろう。もっと恐ろしい人間をたくさん知っているから、大して心

配していないが。

ベットの脇の机に置かれたプリントの束を眺めてみる。

約束通りテストはなくなったらしい。その代わり授業態度で成績をつけると思巻いているらしく、以前のように居眠りができなくなつたと嘆いていた。

クラスでの立ち位置が変わってしまったことに心配はしていない。彼らは彼ら、おれはおれなのだ。壊れた生態系が自分で立ち直るように、そのうち交友関係も元通りになることだろう。

だから、転校生がやってきたのだって別に驚くようなことではなかったのだ。

黒板に書かれた細い字は、まるで彼女を象徴しているようだった。

「森井佳奈もりいかなです。これからよろしくお願いします」

言葉少なく自己紹介をした森井さんは、足音も立てずにおれの斜め後ろの席に座ると、律儀に教科書を取り出して授業の準備を始めた。身長は平均的な女子くらい。おとなしそうな印象なのだが、染めたのだろう茶髪がちぐはぐな雰囲気醸し出していた。第一ボタンまでしめられたワイシャツの胸元には赤いリボンが付けられていて、まるでショートケーキに添えられたイチゴみたいな存在感がある。どこことなく統一感のないファッションだ。

殺風景な部屋でカーテンを閉め切って暮らしているようにも思えるし、食パンをくわえて道路を疾走していそうな気もする。だから変なのだ。

それに時期もおかしい。一学期や二学期の節目ならともかく、もうすぐ夏休みに入ろうかというタイミングで転入してくるものだろうか。

父親の転勤で引っ越してきたというが、うちの学校の近くに有力な会社はない。不審な点ばかりだ。

探偵ものなら真っ先に容疑者として疑われるタイプ。

……とはいっても、わざわざうちの学校をスパイしに来たとかそういうわけではないだろうし、あまり考えすぎて悪い印象を持ってしまふのも良くない。

転校という慣れない環境でただでさえ緊張しているはずだから、ひよつとするとキャラを作っているのかもしれない。第一印象は大切だ。それで半分が決まるといっても過言ではない。

「ねえねえ、森井さんってどこの部活はいるの？」

授業が始まって間もないというのに、隣の席になって浮かれている女子がさっそくちょっかいを出している。興味津津、目がランランといった様子だ。

「私は――たぶん、どこにも入らないだろうと思う」

「なんで？ 習い事でもしてるの？」

「別にそういうわけじゃないけど……私はあまりみんなとかかわるわけにはいかないの」

「そんなこと言わないでよ。あたしたちも森井さんと仲良くなりた いしさ、友達になろうよ。――あ、もしかしてまた引越しちゃうとかそういう感じ？」

「違う。そういうわけじゃないの」

森井さんは会話をしている間、ずっと何かを抱え込んだように暗い顔をしていた。そのうつむいた表情が少しだけ気になったが、昼休みになると風のようにどこかへ行ってしまうて、それ以上クラスメイト達が近寄ることもなかった。

おれは空っぽになった森井さんの机を見る。

この机は転入生が来るというので新調されたばかりの表面に傷一つない新品のはずだ。それが、いつの間にか爪痕のような細い線が何本も深く刻み込まれている。

他にも、シャープペンシルの芯がやたらと目につく。授業中に何度か芯が折れる程度なら不思議でもなんでもないが、森井さんの机の周辺には異常な量の芯のかけらが散らばっていた。幾度となく力を込めたせいで折れ飛んでしまったものだろう。

よもや、もういじめが始まったということではあるまい。

「新堂、なにやってんの？」

先ほど森井さんに絡んでいた女子から声がかかる。

いきなり他人の机の周辺を調べ出したのだから不審がられても当然だ。

「森井さんってさ、何かを我慢している様子なかった？」

「うーん……そういえば授業中もずっとなにかぶつぶつ呟いていたかなあ。ノートもろくに取れてなかったみたいだし、なんだろうね。お腹でもいたかったのかな？」

「独り言？」

「そう。あんまり聞き取れなかったけど、たしか『やめて……』とか『こんなときに……』とか言ってたと思う。なんか不思議な人」

「そうか。どこかへ行くとか言っていたなら教えてほしいんだけど」「わかんない。授業が終わるとすぐに飛び出して行っちゃったから」

おれはお礼を言って教室を出ると、屋上に向かう階段を上った。

まさかお腹が減りすぎて購買にパンを買いにダッシュしていったわけではあるまい。そう考えると全ての筋が通ってしまうのが不思議だが、常識というフィルターにかけてみると赤文字で書かれた単語が消えるように、見えなくなってしまう。

屋上には生徒が立ち入れないようにチェーンで鍵がかけられているから、そのことを知っている普通の生徒は滅多に近づかない。

時々タバコの吸い殻が発見されたりして臨時集会が開かれるくらいだ。

「……やっぱりか」

乱暴に引きちぎられたチェーンが足元に転がっていた。ついさっき壊されたものに違いない。その証拠に、モザイクのかかったガラス戸の向こうからは苦しそうなうめき声が聞こえていたから。

森井さんは必死に右腕を抑えようとしながら、泣いていた。

おれがすぐそばに近寄るまで気づいていなかったようで、赤くなった眼で怯えるようにおれをにらみつけた。その瞳は一瞬、殺意にまみ

れていた。

「誰？」

「新堂瑞貴。あんたのクラスメイト」

「――また、転校ね」

おれは森井さんの右腕を見やる。

長袖のワイシャツはまくられ、やけどでもしたかのようにただれた皮膚が露出している。彼女のそばには厚手のセーターが脱ぎすてられ、赤いリボンも風に飛ばされそうになりながら地面に転がっていた。

苦痛で歪んだ森井さんの顔は、あまり直視していたくなかった。

「近寄らないほうがいいよ。私にもどうしようもないくらい暴走しちゃうことがあるから」

「その腕が？」

こくり、とうなずく。

おれは風雨にさらされて黒ずんだコンクリートの上に寝そべり、はるか遠くに浮かんでいる白雲を眺めた。

「あのチェーンを見たでしょう。あれは、私がやったの。信じられないくらいの力で。さびていたわけでもなかったのに簡単に引き千切れた。この忌々しい右腕が」

森井さんは体育座りになると長いスカートに顔をうずめた。
たぶん、泣いている。

「それはいつから？」

「二週間くらい前から。それ以上は、信じてもらえないと思う」
拒絶の意思。

傷つくのが怖いから、初めに予防線を張っておく。森井さんはどこまで深く傷ついているのだろう。

その右腕でえぐり取られるのと同じくらい、心に傷を負っているに違いないのだ。

おれは天上を指差して、言った。

「あそこから、降ってきたのか？」

「え？」

森井さんが顔をあげる。
まつ毛がぬれていた。

「雨と同じように。雷と同じように。天からは時々想像もしていないようなものが降ってくることもある。あんたの右腕もそれなんじゃないのか」

「……わかるの？」

「死にかけていたときに天国を見た。そこで見かけた瞳が、あんたのと一緒にだったんだ」

「誰かを殺したいっていう瞳でしょ」

「そう」

彼女は諦めたような声で、ぽつりとつぶやく。

「仕方ないの。私ではないから」

「堕天使か」

「あなたは何でも知っているみたい。ねえ、これもどうにかしてよ。なんなのよ。いきなり私の腕に黒いあざができたかと思ったら、わけもわからないまま広がって……全部壊したくなるの！ 家も、道路も、動物も、人間も、なにかも全部を！ 私がしたくてしてるんじゃない！ 私は誰かが傷つくところなんて見たくない！ 友達を自分の手で、自分の意志でもないのに傷つけてしまうものどかしさがわかる？ それがどれだけつらいか、わかる？」

「……………」

「だったら私を助けてよ。知っているなら助けてよ」

森井さんはもう流れる涙を隠そうとはしなかった。とめどなく感情とともにあふれだす涙は、頬を伝い、乾いたコンクリートを濡らししていく。

「ねえ、お願いだから助けてよ！」

それは心からの叫びだった。

おれに向かって叫んだもののなか、はたまた彼女に災厄を与えた天に対してのものなのか。どちらにせよ、その声はおれにも聞こえた。

空は晴れている。

それなのに……なぜだろう、おれの瞳には雨粒が浮かんでいた。

目を袖でゴシゴシとこするとおれは立ち上がり、泣き腫らしている森井さんに、ポケットから取り出した御札を手渡した。

「これは……？」

「知り合いの巫女もどきからもらった御札だ。そこらのお守りとは違って効果があるから、腕にでも張っておけば多少はマシになるだろう。授業が終わるくらいまではもつ筈だ」

森井さんはしげしげと文字の書かれた御札を眺めていたが、やがて意を決したようにそれを右上にくっつけ、その上からワイシャツの袖を戻した。

白いワイシャツでは、服の上からでも黒い部位がすけて見えてしまう。

決して寒い季節ではないというのに着ている紺色のセーターはそのためだ。首筋にもうっすらと影のようなものが浸食している。柄にもなく赤いリボンをつけているのもこれを隠すためだろう。

「少し——良くなった気がする」

「それならよかった。放課後にまた会おう」

森井さんを残し、モザイクのかかったガラス戸から校舎のなかへ戻る。転がっていたチェーンは、廊下の隅に投げ捨てた。

階段を下りている途中で、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴る。学校とは、実に面倒な場所だ。

その後の国語の授業中、森井さんの隣の女子は気を取り直したようにまた話しかけていた。今度は森井さんもどこか安心した様子で受け答えをしている。

心の奥でほっとしながら、おれはすすけた窓で空を覗いた。

その日の終わりを告げるチャイムは、いつだって決まった音階で鳴っている。

慌ただしく部活やら下校やらに奔走する同級生たちを横目に、おれは森井さんに話しかけた。

「どう、調子は？」

「悪くはない……けど、そろそろ効果が弱くなってきている、気がする」

そう答える彼女はどこか不安げだ。

今が落ち着いているぶん、御札の効力が切れてしまった時が怖いのだ。平穏な時間ほど、未来を恐怖させるものはない。

「なら急いだほうがいい。アポイントメントは取っていないが例の巫女さんに頼んで御札を何枚かもらって帰ろう。それと、ご両親に今日の帰りが遅くなるかもしれないと伝えておいて」

「なにか、するの？」

「天使がいるなら、魔法だってあるってことさ」

にっこり微笑むおれを森井さんはいぶかしげに見つめた。

大量の寄生虫を招いた元凶である巫女――岡倉の住んでいる神社はうちのすぐ近所だ。帰路の途中にあるため、たまに相変わらずジャージ姿でいるのを目撃してしまう。

そのたびにお賽銭をせがまれるので鬱陶しいのだが、「また神様が怒るぞ」などと脅されては少ない小銭を寄付させられるのだ。

「たのもー！」

と境内に向かって呼びかけてみる。

神社のなかは簡素としたもので、何本か桜の木が生えているくらいだ。古めかしいおさい銭箱と、その横にあるお守りの販売所が申し訳程度に添えられているが、その収入だけでは岡倉の小遣い程度にしかないだろう。

木の床を踏む足音が聞こえて、珍しく巫女装束を着ている岡倉が姿を現した。

顔立ちはいいから、口さえ開かなければ良く似合っている。

「どうした。うちの神社では結婚式も行えないことはないが、さすがに親戚一同を呼べるほどではないぞ。まあ二人だけのささやかな式ならできるが……見積もりはどの程度にしようか？」

女子を連れてきたのを盛大に勘違いした岡倉は否定する間もなくまくしたてた。これだから苦手なのだ。本当は頼みごとなどしたくないのだが、一生かかっても払いきれないくらいの貸しがあるのでよししよう。

「黙っておれの話聞け」

「ああそうか。学生の身分では予算も少ないだろうし、私に頼んで安くしてもらおうという魂胆だな。そうはいかないぞ。私はびた一文負ける気はない」

払いきれないくらいの貸しを完全に忘れているようだ。

おれは大きいため息をついて、寄生虫の群れに放り込んでおかなかったことを後悔した。

「この前の御札を10枚ほどわけてくれ。それから、できることなら家までついてきてほしい。ちょっと手伝ってほしいことがある」

「1枚105円のところを消費税をおまけして1枚100円でどうだ」

どうせもとかから100円なのだろう。こざかしい。

「なぜ金を払う必要がある。おれはお前に金額に直せば国家予算並みの貸しがあるんだぞ」

「そんなもの、いつ作ったというのだ」

「この神社に放火すれば、今度は蟲程度では済まないものが出てくるかな」

「こ、この罰当たり者め！」

「黙れ下郎が」

「……仕方ない、特別に無料でわけてやろう」

負け惜しみを残して、岡倉は境内の奥へと消えた。やけに肩が凝ってしまった。

森井さんはおれたちのやりとりを始終身をすくませながら見物して

いたが、岡倉がいなくなったのでようやく落ち着いたようだった。それでも、心なしか呼吸が荒い。

「一体どんな関係なんですか？　ずいぶん親しげに見えましたけど……」

「大きな勘違いだ。あいつにとって、おれは神様みたいなものはずなんだが、いかんせん巫女のくせに不信心で困る」

「はあ……」

いまいち理解していないようだ。説明したところで長くなるし、納得するとも限らないのでおれはそれ以上何もいわなかった。

「ほい。これでいいか」

白い和紙にくるまれた御札の束を持って岡倉が再び姿を現した。透き通るような肌の、生意気な口を開く。

「それで、家までついてきてほしいと言ったがそれは無理だ。今日はちよつと用事が立て込んでいてな、この服もそのためのものなのだ。また後日なら別にかまわないが」

「それなら仕方ない。次の機会はない」

「……いやに不愛想だな」

「せいぜい神道に精進してくれ」

おれはそう言い残すと、森井さんと一緒に鳥居をくぐった。後ろからなにやら悪態をつく声がしている気もしないではないが、たぶん空耳だろう。

家に帰るとおれはすぐにリビングにある家具の類を片づけた。人目につかなくて丈夫な地下室でもあれば都合がいいのだが、あいにくただの一軒家である我が家にそんな便利なものは備え付けられていない。

重たいテーブルやなんやを退避させるのは一苦労だったが、おれは熟年の引越し屋のようにてきぱきと作業をこなし、すぐに準備は整った。

カーテンを閉め、むき出しになったフローリングにガムテープで模様を作りだす。

最初に大きな円を描き、その中に五角形を星を入れる。

そらにその中に円陣やら文字やらを書き込むことによって、神聖なる結界を錬成することができるのだ。

「魔方陣、ですか？」

「森井さんの右腕に憑いているのは展開を追放された身の堕天使だ。もう純潔なる存在とは認められないだろう。だからこいつをつかって天使を引きずり出し、浄化する。汚れは浄化すると消えてしまうから、それで万事解決さ」

結界を張り巡らせるためには専門の知識が必要になる。

はるか昔の時代に活躍したとされる陰陽師はそのプロフェッショナルであり、日本流の始祖なのである。原理は同じだが、西洋に伝わったものを魔法と呼び、東洋に伝わったものを神通力と呼ぶのだ。

理論は基本、何らかの媒介によって自分のなかのエネルギーを他のものへと変換することによって成り立っている。杖や魔方陣は変換を行うための装置なのである。

呪文詠唱はいわばスイッチであり、祈祷や踊りもそれにあたる。

魔法使い、と呼称される人は意外と身近にいるものだ。

素質はあるのだが自分の能力に気付かずそのまま一生を終える者。気づいた方がいいが制御の仕方がわからず自滅する者。良い師匠にめぐりあい、おおごとにならない程度に生活に活かしている者――など種類は多様だが、何の訓練もなしに使いこなせる才能ある魔法使いは少ない。

だから認知されていないのだ。

おれのように魔法使いの友人がいて、少し習っただけで師匠を超えてしまうような不届き者はほとんどいないのだから。

「よし、準備完了」

複雑に組まれた魔方陣と、床にびっしりと書き込まれている油性インク。掃除するのが大変そうだと今から憂鬱になるが、これも人助けのためだ。

何の罪もない人がある日突然、不幸のどん底に落とされていていい理由

なんてない。

理不尽な世の中に立ち向かってこそ、才能の使いどころがあるというものだ。

様々な部品をつかって組まれた機械が高性能であるように、魔方陣もいろいろと工夫を凝らして精度の高いものに仕立て上げることができる。万全を期すため、念には念を入れた陣だった。

「森井さん、その中心に立っていてください」

彼女はすでにセーターを脱ぎ、黒くなった右腕をさらけ出している。緊張した足取りでゆっくり魔方陣の真ん中に立つと、目をつむった。

「……発動」

素足からエネルギーが魔方陣に流れ込んでいくを感じる。

魔物をよびだすわけでもないし、少しおほらいをする程度なら何の問題もない。

薄暗い室内でガムテープがうつすらと光り輝いている。周りを囲むように配置された御札も、豆電球のようなほのかな光を放っていた。

「あ……う……」

苦しように顔をゆがめる森井さん。

とりついた悪霊を無理やりにひきはがしているわけだから、相当な違和感や痛みがともなう。それでも、幸福をちぎられる苦しみに比べたらずっと楽だ。だからおれはあえて何も声をかけないし、森井さんもそれをわかつているから懸命にこらえようとしている。

「く……ああ……」

指先から、脱皮をするように黒い影が遊離を始めるのが見えた。ゆっくりと、洩るように森井さんの体から脱していく。まるでピーターパンのようだ、とおれは思った。

影は指先からひじにうつり、二の腕へと渡る。影の離れた部分は綺麗な肌色になり、人間らしい色を取り戻していた。やはり原因は幽霊のように透き通った体を現し出したこいつにあるのだろう。

想像よりもやや大きな体格をしていたその影は、森井さんよりも一回りくらい身長が高かった。

片方しかない翼は、リビングを飛び出しそうなくらい広げられている。やはり飛ぶためにはそれなりの大きさが必要なだろう。

森井さんの体が清められていくにつれて、影の細部の輪郭が明確になってきた。

古代の壁画に残されているように端正な顔立ちをしているが、その表情は苦悶そのものだ。もがれた方の翼は根元が痛々しく、布を巻きつけているだけの衣服はあちこちに傷がつけられていた。

憎々しげにおれをにらみつける瞳が、徐々に完成されていく。

やがて墮天使の姿が元通りになると同時に、森井さんは氣力を失って地面に倒れこんだ。

「……我に抗うのはうぬか」

「そうだ。あんたを殺しに来た」

「人の身の分際で天使に抗うとは、愚かの極みではないか。何故下界に住まううぬごときが、我を殺さんとする？」

「あんたが嫌いだからだ。理由はそれで充分だろ」

「……我と同じ目をしているな、人間よ。曇りのない、怨恨の瞳だ」
「一緒にするな。おれはただあんたを消せばいい」

「私もそうだ。卑劣なことをする神どもを消し去りたかった。だが敵わず、このように地上に墮落せしめられた。実に忌々しい」

「あんたも誰かを不幸にしている。それだけで戦う理由になる」

おれは残しておいたもう半分の御札を取り出し、墮天使に向かって投げつけた。やつは魔方陣の外に出ることができない。刺すような視線だけを送り続けてくるだけだ。

「神を祀るための文字か。そのようなものに消されるとは……皮肉なものだな」

「あんたには後悔させる気もねえ。跡形もなく、微塵も残さずに消失しな」

「そういうわけにもいかぬ。私がいたずらにこの少女を苦しめていたかと思っただか？ そうではない。少しの間、身を借りて体を休め、再び天に舞い降りるためにこの少女が必要だったのだ」

「それはあんたの理由だ。森井さんが不幸になっていい理由じゃない」

「人間ごとき、何故私が気にかかる必要がある？ お前たちも犬や猫の都合をいちいち考えているわけではあるまい。それと同じだ」

「知るか。おれはあんたを殺したいから殺す。誰かを守るために殺す」

「……どこまでも私とそっくりだな。お前がこの少女を守りたいのなら、消される私のことは思慮に入れぬのか？」

「ぐだぐだと死に損ないがぬかすんじゃないやねえよ。とっとと消えな」おれはそれっきり、口をつぐんだ。

堕天使はまるで存在を言葉に乗せているかのように次々と愚にもつかない理屈を並べ立てていたが、おれは聞く耳を持たず、堕天使の影が薄くなっていく姿を眺めた。

御札の効果はもらいたてなだけあって、拔群だ。

やつがどれだけ暴れて抵抗しようと、魔方陣の破れる気配すらない。はむかうことで却って体力を消費して、消えるまでの時間を短くさせているくらいだった。

薄くなる。

消えかける。

死ぬということ。

恐怖する様子は見せなかったが、これ以上何もできなくなるということ惜しみながら、堕天使は死んだ。跡形もなく。

「終わったぞ」

声をかけても、森井さんは目を覚ましそうになかった。おれは彼女の体を優しく抱き抱えると、2階にある自室のベッドに運んで、そっと寝かせておいた。

閉め切ったカーテンを開けると、紅の夕焼けが長い影を作りだしながら夜を迎えようとしていた。

墮天使少女（後書き）

解説という名のもとに筆者があとからごたごた述べるのはあまり好きじゃないんですが、少しだけ補足を。

まあ、いわゆる中二病と呼ばれるものが、本当に墮天使やらが憑いている場合はほとんどないわけであって。

でも、何か原因があるのかもしれないね、っていう話です。

段々、更新間隔が広がってきていますが、次はコミカルに、そして迅速に書きますので、これからも読んでやってください。

放課後のテレパス（前書き）

あんな宣言をしておきながら、見事に約束をたがえてしまい大変申し訳ありませんでした……。

放課後のテレパス

学校からの帰り、人通りの多い駅の地下街を歩いていると、ふと後頭部に刺さるような感覚が生じて振り向いてみたのだけれど、そこには紫色のパーマをかけたおばちゃんが両手に大きなビニール袋を提げているだけだった。

一瞬、おばちゃんと視線が合ってしまい気まずい空気が流れる。

気のせいかなと思いなおして再び前を向くと、今度はさっきよりも強い違和感を覚えた。これは勘違いや気のせいなどではないだろう。どうせ背後を確認してもだれもないのだから、裏をかいてやろうと思って両手を後ろに回してそこにあるものをつかむ。わしゃ、という乾いた感触。嫌な予感がした。

おばちゃんの、指に巻きついてしまった紫色の髪をほどこきながら、おれは平謝りに謝った。

……誰だか知らないが、許すわけにはいかない。

おばちゃんの睨みつけるような視線をもろに浴びながら、おれはそう誓った。

ポケットから携帯電話を取り出し、電波の度合いを確認する。圏外。ひよっとするとメリーさんが電話をかけようとしているのだが、つながらなくて恨めしい目つきでおれを追いかけているのかもしれない。

それは勘弁してほしい。

地上に出なければ電話に出ることができないのに、おれはもうしばらく地下街に用があるのだ。

目的はケーキを買って帰ること。

今日はひいきにしているケーキ屋の特売日で、一品だけ半額で購入することができるのだ。授業中からこればかりを楽しみにしてきたというのに、いきなりメリーさんとやらの脅かされてケーキを落としたら半殺しでは済まないくらいにの地獄を見せても気がおさまらな

い。

年頃の高校生は甘党なのだ。こればかりはどうしようもない。とるならおれの背後ではなくゴルゴ13でも狙えばいいものを。なぜ、平凡な学生がどこから来ているのかわからない電波に怯えなければいけないのか。

「……ちくしう」

今に見ている、痛いめを見せてやる。

おれはひとまず優先事項であるケーキを買うことを先に済ませることにした。これで売り切れていたなら再起不能になるかもしれない。そうならないように願って、おれはやや速足で通路を進んでいく。

「ありがとうございます」

店員のスマイルよりも弾んだおれの心の大部分は、今購入したばかりのモンブランに集中していた。甘くところけるような渦巻状のクリームの部分と、クッキーのように歯ごたえのある台のコラボレーションがたまらないのだ。頂上に天使のように添えられたのマロンも忘れてはならない。

そのプレシャスが、おれの右手に持っている小箱に入っていると思うと、自然と足取りも軽くなるというものだ。自制心を取り払えば、スキップどころか愛してるの響きもなしに空も飛べそうだ。

……あの、ちくちくと刺激が続いている感覚を除けば。

どういうわけか高校球児の頭をなでているような感触が、ずっと続いている。まるでストーカーのように、逃げても逃げてもついてくるのだ。

非常に不愉快だ。

さっきのおぼちゃんの借りもある。得体のしれない犯人の正体を暴けたなら、ねちねちといびってやろう。波の満ち始めた海岸線にうめるくらい、じわじわと。

それなのに、視線は楽しむかのように勢いを強めて。

このまま帰って全てを忘れるのも手か——いや、それではおれのプライドが許さない。

絶対に負けてなるものか。

とりあえず、原因を究明することが先決だろう。この奇妙な感覚はどこから発せられているものか。

背中を壁にくっつけてみる。誰かが背後にいるのならこれでどうにかなるはずだったが、刺激はなくなるどころか少しだけ強くなった。ということは、壁をすり抜けられるか、あるいはもっと遠くからこの怪電波を送っているに違いない。

幽霊が相手となると、また岡倉の世話にならなければいけないので癪に障る。というわけで、遠くから説を採用することにしよう。

そもそも、犯人はどうしておれにつきまとうのだろう。

意識的か、それとも無意識か。

わざとではないのなら責めようがない。おれはどうしても復讐がしたいので、犯人は意図的におれを狙っているとする。

では、その理由は？

おれのが好きだから。恋の電波というやつか。却下。今はあまりロマンスという気分じゃない。どちらかと言えばドロドロの戦争ものだ。

おれの顔に何かついているから。顔をこすってみる。変化なし。

定期券を拾ったのだが、シャイなため声をかけられずにいる。ポケットを確認。……の前に、おれは学校まで徒歩で通学しているので定期券を落しようがなかった。

他には……と考えて、おれは目をつぶる。

脳に直接響く、くすぐったい感触が浮かび上がってくる。誰かの指が脳みそを探って遊んでいるような、体の内部からいじられている印象だ。

これは何をしているんだ？

「これは何をしているんだ？」と誰かが繰り返す。

誰なんだ？

「誰なんだ」とどこかで響いた。

……そうか。

「そうか」と誰かがどこかで言った。

禿げたおっさんがビキニの水着を着てパンダメイクを施しながらパラシュートで降下していくときの姿を思い浮かべた。

大学生くらいの女性が、笑いをこらえきれずに吹き出した。

「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい……」

おれたちは地下街にあった喫茶店の奥の方にあるテーブル席を陣取って、コーヒーを注文したところだった。場所代という意味なのか、コーヒーの値段は目を丸くするくらい高かった。

そして、惘然とするおれの目の前で机に頭をこすりつけんばかりの勢いで謝罪しているのが、違和感の元凶である犯人だ。

むせこむような笑い声が聞こえたとき、おれはすぐに彼女を見つけ出し腕を掴んでこの喫茶店に引きずり込んだのだ。それからというもの口からついて出たのは「ごめんなさい」の言葉ばかりで、コーヒーを運んできたウェイトレスも何事かと驚いていた。

肩くらいまである黒髪に垢ぬけない顔立ち。童顔というほどではないが幼い印象を与える人だった。

五分ほど謝り続けたあと、ようやくその人は顔をあげた。

「……ほんのいたずら心だったんです」

（もうおれが許したと思ってますか）

「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい」

我ながら鬼畜だとは思うが、見も知らぬおぼちゃんの髪を思い切りつかんでしまったことへの怒りはまだ消えてはいなかった。

美味しくもないコーヒーを不愛想にすすりながら、おれはその人が謝るのを眺めていた。

口は開かない。しゃべらなくても言いたいことは伝わるからだ。

「……まさか私の力を感じられる人がいたとは思わなくて」

（常習犯ですか。たちが悪い）

「でも、知らなければなかったのと同じことですし」

開き直ったように言う。どこかの哲学書でも読んだのだろうか。いやに自信満々だった。

「そうなんですよー。私実は、これでも文学科ですて。この前読んだ本に猫の話が載ってて、確認してみるまではその猫がいるとかいないとか」

（シュレディンガーの猫ですか）

「そうそう、そのシュワちゃんの猫です」

（銃で撃つても死にそうにない猫ですね……）

「動物の話になったとたん、殺そうとか思うなんて残酷な人なんですネ。ちよつと失望しました」

（……あなたも動物として考えましようか）

「じよ、冗談ですってば。スキンシップをとるための軽いジョークです」

テレパスの彼女は焦ったように取り繕っているが、たとえ心が読めなくともウソをついているのは明らかだった。どうやら天然とかそういう範疇を第2宇宙速度で飛び出してしまった人らしい。

ちなみに、地球の重力を振り切るための速度のことだ。

「ひどいです……」

（第3宇宙速度じゃないだけありがたいと思ってください。太陽系もなんのその速さです）

「へえー、そうなんですか」

感心したように言う。

確か中学生の理科の範囲に含まれていたはずだと思うのだが。彼女の脳みそは何を学んでもすぐに忘却の彼方へと追いやってしまいうだ。

「あの、さっきから悪い印象しか伝わってこないんですけど——」
おずおずと尋ねるが、おれは冷たい視線で返事をする。

そろそろイメージするだけというのもつかれた。言葉よりもダイレクトに伝わる分、遠慮や隠し事といったような小細工が利かないのだ。まあ、彼女にはそれもないのだけだ。

おれはもう一口コーヒーをすすり、彼女もそれをまねした。はじめて口を開く。

「それで」

「はい」

「どうしておれの頭の中身なんて見ようと思ったんですか。あのときは恥ずかしながらケーキのことしか考えていませんでしたけど」

「いやー、学生さんの考えていることってすごく面白くて、手当たり次第に漁っていたんですよ」

「……趣味が悪い」

なんでも、恋愛をしている人は甘酸っぱくてたまらなく、悩み事を抱えている人のは足の裏がむずむずするような感覚があり、それがたまらないのだという。どんな映画よりもリアルで、面白いそうだ。疲れ切ったサラリーマンは仕事のことがばかり考えているし、主婦の思考はその日の買い物でいっぱいだから、自分の人生を目一杯に生きている若い人の方が好みらしい。

おれも目をつけられたうちの一人だったというわけだ。

「今までテレパスの能力を勘づかれたことはおろか、その気配さえ気づかれなかったんですけど……どうやら私のことが分かる人がいるみたいだと思ったらどこまでいけるか試してみたくなくて。絶対にばれない自信がありましたし」

「おれはそのせいでロクでもない目に遭っているんですよ」

「あれは面白かったです。まさか真後ろのおばちゃんの髪をつかむなんて」

反省している様子はまるでない。

おれは想像のなかで彼女の頭を思い切り殴った。女性に暴力をふるうのはあまり好きじゃないが、おれは心に充分な痛手を負っているのだ。

実際は傷ついているわけではないのだし、良心が痛むこともない。これはいい気晴らしになりそうだ。おれはニヤリとほほ笑んだ。

「……なにか悪だくみしてませんか？」

「そんなことありませんよお。それより、まだお名前をうかがってませんでしたね」

「あなたは新堂さんで合ってますよね。私は白谷結衣しらたにゆいっています」
「そうですか。では白谷さん、円周率は好きですか？」

「あんまり好きじゃないです。どうしてそんなこと聞くんですか？」
おれは白谷さんの瞳をじつとのぞきこみながら、彼女の脳内に届くように数字を数え上げた。

(3. 1 4 1 5 9 2 6 5 3 5 8 9 7 9 3 2 3 8 4 6 2 6 4 3 3
8 3 2 7 9 5 0 2 8 8 4 1 9 7 1 6 9 3 9 9 3 7 5 1 0 5 8
2 0 9 7 4 9 4 4 5 9 2 3 0 7 8 1 6 4 0 6 2 8 6 2 0 8 9 9
8 6 2 8 0 3 4 8 2 5 3 4 2 1 1 7 0 6 7 9 8 2 1 4 8 0 8
6 5 1 3 2 8 2 3 0 6 6 4 7 0 9 3 8 4 4 6 0 9 5 5 0 5 8
2 2 3 1 7 2 5 3 5 9 4 0 8 1 2 8 4 8 1 1 1 7 4 5 0 2 8
4 1 0 2 7 0 1 9 3 8 5 2 1 1 0 5 5 5 9 6 4 4 6 2 2 9 4 8
9 5 4 9 3 0 3 8 1 9 6 ……)

「あぎゃあああああああああ！ やめてください！ 頭がパンクします！」

頭を抱えてのたうちまわる白谷さんの様子は実に滑稽だ。せっかくなら流れ込んでくるものを記憶すれば簡単に円周率を覚えることができるのに。

おれは雑念を捨て、純粋に無機質な数字を思い浮かべられるように集中する。

傍目には目をつぶってめい想する制服姿の少年と、なぜか頭部を押えて苦しんでいる女子大生の奇妙な絵柄が映っていることだろう。気にするまい。

(…: 4 4 2 8 8 1 0 9 7 5 6 6 5 9 3 3 4 4 6 1 2 8 4 7 5
6 4 8 2 3 3 7 8 6 7 8 3 1 6 5 2 7 1 2 0 1 9 0 9 1 4 5

6	4	8	5	6	6	9	2	3	4	6	0	3	4	8	6	1	0	4	5	4	3	2	6	6	4	8	2
1	3	3	9	3	6	0	7	2	6	0	2	4	9	1	4	1	2	7	3	7	2	4	5	8	7	0	
0	6	6	0	6	3	1	5	5	8	1	7	4	8	8	1	5	2	0	9	2	0	9	6	2	8		
2	9	2	5	4	0	9	1	7	1	5	3	6	4	3	6	7	8	9	2	5	9	0	3	6	0	0	
1	1	3	3	0	5	3	0	5	4	8	8	2	0	4	6	6	5	2	1	3	8	4	1	4	6	9	
1	9	4	1	5	1	1	6	0	9	4																	

「ごめんなさい。本当にごめんなさい！ もうしませんから！」

白谷さんは閻魔大王に許しを請うかのような態度で必死に謝り続けている。

これはもう少しからかって遊べるだろう。

「そ、それだけは勘弁を！」

「あれ？ まだその能力^{ちから}を使うつもりですか？ 懲りない人ですね」

「ち、違うんです！ これは私がわざとやっているんじゃない、なんていうか切断できなくなってしまったみたいで」

「どういことですか？」

「たぶん新堂君が私のほうにアクセスしようとしたからだと思うんですけど、そのせいか私たち頭の中が繋がったままになってしまっているみたいなんです。だからいやでも新堂君の考えていることがわかってっちゃうんです」

おれの胸にほんの少し浮かんだ疑惑の気持ちを敏感に読み取って、白谷さんはぶんぶん頭を横に振った。

「信じてくださいよう」

……まあ、好きで円周率を頭の中に流し込まれる人はいないだろうし、もしそうだとしたら彼女は相当なM性質を有していることになる。それはそれで好都合だが。

「わ、私、そんな趣味はありません」

顔を真っ赤にして否定する。

またまた、隠さなくてもいいんですよ。

「違いますって！ いい加減にしないと怒りますよ？」

「どうぞどうぞ。おれはそのくらいなんともありませんし、耳元で

がみがみ怒鳴られていてもフェルマーの大定理を証明することくらい余裕です。どちらかという和白谷さんが困るんじゃないですか？」

「……わかりました」

ところで、おれは彼女を責める気なんてこれっぽちもなくしてしまっていたのだが、いちいちリアクションの面白い白谷さんを見てみると苛めてやりたい気持ちが噴出してきたこともなくもない。

テンションも上がってきたことだし、遊んでみるか。

おれはそう決断すると、昨夜の深夜番組で放送されていた心霊写真や恐怖画像、雪男のようなものでやたらめったらに怖そうないメージを思い出す。番組の主旨は後半になるにつれて大きくずれていったが、要は面白くて話題になりそうな写真を取り上げられればよかったのだろう。おかげでレパートリーだけは豊富になった。

あの手の写真にはたいい合成が施されている。

おれは脳内で不鮮明な個所を勝手に補正し、あることないことを付け加えてよりおどろおどろしい夏の夜に似合いそうなビジョンを作りだして白谷さんの思考へ送りつけた。

拒絶しようとしてもできないというのは、逆手に取られると実に厄介な能力だ。

白谷さんのもれなくその恩恵にあずかってしまい、絶叫マシンに乗った女子大生みたいな悲鳴をあげながら涙目でおれをにらみつける。

「なんですか？」

「どうして私が怖がりなのを知っていてそーゆーことをするんですか？ もうたくさん謝ったし、許してくれたっていいじゃない」

「ああ、それならもうとっくのとうに」

「じゃあ、この得体のしれないどろっとした髪の毛の女性とか、人影もないのになぜか肩に置かれている血まみれの右手とか、壁一面に群がっているGとか――。か、体の震えが止まらないからすぐにやめてほしいんだけど」

「おれの方もじつはテレパスで遊ぶことに目覚めちゃいまして。そ

れに知らないまま頭の中のお花畑を覗かれた人たちの復讐も兼ねて、ちょっと楽しいことをしようかと。楽しいことは嫌いですか？」

「じ、自分が楽しいだけじゃない！」

顔を真っ青にしているのか、真っ赤にしているのかよくわからない顔色で白谷さんは非難した。

おれは肩をすくめる。

「まあ、そうですけど」

そこにおもちゃがあったら遊びたくなるじゃないですか。

「それに減るものじゃないし」

「わ、私の寿命が減るかもしれないでしょ！」

「大丈夫。あなたはきっと長生きしますよ」

おれはにっこりと天使のスマイルを惜しみなく白谷さんに送りつつ、かたわらでは「ムンクの叫び」をさらに混沌とさせたような絵画を想像していた。

キヤーキヤー言いながら耳をふさごうとする彼女の様子は、まるで毛虫を見た少女のようだ。

「ところで」とおれは言う。「一般的な高校生が普段何を考えているのか教えて差し上げましょうか？」

「え？」

白谷さんが何かに気づいたように目を丸くする。

たぶん経験があるのだろう。桜色よりももっと濃いピンクの世界を垣間見てしまった経験が。

「そ、それは」

「……嫌なんですか？」

「は、恥ずかしいと思わないの？　これは立派な痴漢でセクハラなんだからね！」

「何を想像しているのか知りませんけど」

「この変態！」

「おれは決して」

「助平！」

「そのようなことは」

「あーんなことや、こーんなことを妄想してばかりいるからそういう情けない子に育つの！ もっと子供らしく純情なことを考えていればいいの！ 赤ちゃんはコウノトリに運ばれてくるんだから！」
「……………」

大声を出したため荒い息をしている白谷さんは顔をトマトのように真っ赤に染め上げている。あまり人気がないとはいえ、喫茶店でくつろいでいる客たちの視線と興味を一身に浴びていることによく気が付き、今度はリングゴのように紅潮した表情で恥ずかしそうにうつむいた。

「恥ずかしい人ですね」

「……………」

店内に飾られている鳩時計が、5時ちょうどを告げた。

それがきっかけになったのか頭の奥でプツン、と糸の切れたような音がした。まるで糸電話の糸を切断したように。

「あ！」

と白谷さんがうれしそうな表情を見せる。どうやら接続が解除されたらしい。

「やった！ ついに解放された！」

厳密に言えばおれのほうが被害者なのだが、無邪気に喜んでいる彼女を見ているとそんなことを口にする気もおこらなかった。

ケーキを片手に立ち上がると、コーヒー二杯分の領収書を持ちレジに向かう。結局、ケーキ代よりも高くついてしまった。それも悪くない。

「せっかくですし、うちでケーキでも食べていきますか？」
とおれが提案すると、

「結構です」

ときっぱり断られてしまった。

放課後のテレパス（後書き）

……まあ、言い訳させてもらおうと旅行＋試合＋部活＋趣味のサッカーが連続で訪れてしまったため、書く時間がなかったんです。私は書き始めるまでにすごく時間を要する人なので、一度流れが途切れてしまうとなかなか復帰できないというか……はい、すみません。

それにコミカルな展開は苦手です。

会話とかのリズムをもっとよくできたらいいんですけど。

あんまり中二病っぽくなかったですが、要は誰かに自分の頭の中身をのぞかれているんじゃないかってことを小説にしてみたものです。インセプションか！

game part 1 (前書き)

夏休み中に終わらせるつもりが、ずいぶんと長くかかってしまいました……。

段々中二病からは離れてしまっていますが、これが最後ですのでどうぞお付き合いください。

game part 1

5人の男女が、ひとつの部屋に集まり膝を合わせて話し込んでいた。

調和のとれたアンティークな家具には微細な傷もなく、磨かれた表面には真剣な表情をした5人の姿が映し出されている。

天上には安価な蛍光灯などではなく、ダイヤモンドのように光を反射するシャンデリアがつりさげられている。手を伸ばしても届きそうにない位置にあるそのシャンデリアは、どこか遠くから光を放っているように思えた。

透明なガラス机を囲むようにして置かれているソファアの座り心地は、気を抜いたら眠ってしまいそうなくらいだ。それくらいに神経は張り詰めていたし、おれたちは疲れ切っていたのだから。

「ゲームをしようじゃないか」

その一言がすべての始まりだった。

何も特別なことはない、強いていえば黒々とした雨雲が空を覆っていた日のことだ。

おれは普通に学校から帰ってきて、何事もなく1日を終えるはずだった。——奇妙な男が、リビングで紅茶を飲みながらくつろいでいるなんてことがなければ。

似合っているのか似合っていないのか、その男は黒いタキシードを着込んでいた。彼の服は彼の一部であるかのようにも見えたし、ちよつと角度を変えるとひどく異質なものであるようにも感じた。

まるで目の錯覚を利用した騙し絵のようだ。

かわるがわる違う図形が見えたと思えば、消えていく。

「誰だ、あんた？」

おれはその人に尋ねる。

首もとに据えられた赤い蝶ネクタイがいやに目立っていた。

「あまり気になさらないでください。私がだれであるか、などとい

う些細なことよりも、私がなぜここにいるのかを考えてみてはいかがかね？ 変装が得意なコソ泥とかではないことはたしかだがね」

上手なウイंक。

日本人ではないのだろうか、西洋風の彫の深い顔立ちをしているのとは対照的に、流暢な日本語だった。本当にどこかの怪盗みいだ。

おれはもっていたカバンを床に置き、男の座っている庶民的なソファアを挟んだ場所に腰を下ろした。ここからだと言った相手の様子が手に取るようにわかるのだ。

そうは言っても仮面をかぶっているかのような微笑を絶やさないので、あまり意味はないのかもしれないけど。喋っていなければ人形と勘違いしてしまいそう。

「空き巣かい？」

「紅茶は勝手に拝借したが、それ以外には何も盗っていない。不満があるなら後で英国産の最上級品を郵送しよう。君の家のは少々、味に深みがない」

「悪かったな、安物で」

「いやいや。君ならばこの程度の茶葉でも美味しく淹れることができるだろう。私もなかなかの腕前だと自負しているのだがね、何においても最上の才能をもつ新堂くんとは比べるのは気が引ける。いかがかね、君も一杯」

「いただこうか」

男は優雅な手つきでティーポットから紅茶を注ぐと、音も立てずおれの前に差し出した。洗練された一連の動作によどみはなく、いかにも手慣れているという感じだった。

湯気を立てているカップはまるで別世界からやってきたかのように美しい。たしか食器棚に飾ってあったはずなのだが。

フーフーと冷ましてから口をつける。

「……無粋ではないかね？」

「おれは猫舌なんだ。他人のことを考えて茶を出すのが日本の礼儀

ってやつでね、郷に入っても従わないあんたのほうがよくばど無粋だよ」

「……ふむ。東洋の美学というものか、興味深い」

男はそれから、自分のことをピエールだと名乗った。いかにも胡散臭い名前だが、どうせ本名を知ったところで役に立たないのだから偽名でも同じことだ。

何人か、という問いには答えない。代わりに紅茶を一口すするだけだった。

勝手に他人の家に上がりこんでくつろいでいるような肝っ玉の座った相手だ。おれがどのようなにしたりをかけたところでボロはださないだろう。それに今しがた気付いたことなのだが、ピエールは土足だった。幸いなことにフローリングには泥などの汚れはない。日本の文化に慣れていない。それくらいしか推理できることはなかった。

それにしても上手すぎる日本語だし、土足であるほかにおかしい点もない。おれは考えるのを放棄した。

「それで？ ミスター・ピエールは一体何の用があっておれの家にいるんだ？ ややこしいことは抜きにしてさくつと要点だけ話してくれ」

「そういうご要望なら、そういたしましょう」

そこだけ改まった態度で、ピエールが言った。

タキシードの胸ポケットからおしゃれに彩られた手紙を取り出し、こほんと咳払いをする。

「新堂瑞貴様^{しんどうみずき}。このたびは突然の来訪、誠に申し訳ありません。どうしてもこの招待状は直接手渡したかったもので。――我々の目的はひとつ。あなた様を幻夢館にご招待することです」

「幻夢館？」

「はい。そして、これがその招待状となっております」

そう言って渡された招待状は絹のような手触りで、すぐに高級なものだと見当がついた。封には赤いリボンが使われている。リボン

の巻きつけられたボタンをはずすと、中から英語の筆記体で書かれた手紙が出てきた。

簡潔にまとめられた文章は、王家からパーティーに招待されたようにも思えた。

「……まあ、つまり。幻夢館に來いということだな？」

「さようでございます」

「わかった」

学校にはインフルエンザで休んでいるとでも連絡しておけば問題ないだろう。授業よりもずっと面白そうなことが待っているのだから、招かれない理由はない。平穩な日常など、時間の浪費でしかないのだ。

おれがその手紙をしまおうとすると、

「大事に取っておいたほうがいい。これがなければたとえ館のすぐ前に来たとしても、入ることはできないのだから」

「本人だとしても？」

「はい」

ピエールは銀に光る腕時計を見やると、そろそろお邪魔しようと言って席をたった。玄関の外まで見送ってやる義理もなく、おれは座ったまま無然とした態度で頬づえをついている。

ピエールはさして気を害した様子もなく、むしろ上機嫌で退室しようとしたが、何か忘れ物でもしたかのように振り返った。対面した時と同じ微笑を張り付けながら。

そして、言った。

「ゲームをしようじゃないか」と。

道路の幅いっぱい存在感を示している、ダックスフンドのように胴長の黒いリムジンが現れたのは、またもや計ったように学校から帰ってきてすぐのことだった。

塀との距離は人が1人やっと通れるくらいものだ。

おれは身をひねってようやく玄関までたどり着くと、招待されるべき服装を考えた。

やはり学生の身であるから、制服で行くのが礼儀というものであろうか。それともジーンズにポロシャツといったカジュアルな服装でもいいのだろうか。

正直なところ制服では行きたくない。機能性は悪いし、なにより個性がなくなってしまうからだ。おれは悩んだ末に、洋服筆筒から買ったばかりの洋服を取り出した。

「お待たせいたしました」

待たせたのはこちらなのだが、運転手と思しき人が一礼をして重厚なリムジンのドアを開ける。

革張りの座席は適度にクッションが利いていて、車内にはほのかに香水も香っているようだった。おれと、日本人の運転手の他にはだれも乗っていない。ずいぶんと贅沢な使い方だ。

「ここからのくらいかかるんですか？」

おれは後部座席から運転手に尋ねた。運転手は返事をよこす代わりに、車を発進させる。

エンジン音さえ伝わらない。するすると流れていく外の景色はあっという間に高速道路の見晴らしの良いものへと変わり、心地よい上品な静寂の中で、瞼の重くなるまま素直に眠ったのだった。

「――到着いたしました」

そう声がかかって目覚める頃には、ちょうど夕暮れが終わっていた。

まだ明るさの残る闇がリムジンの周りをとりまく森を染めている。時計を見ると、7時を少しまわったところだった。ずいぶんと眠りこんでしまっていたらしい。

車内に漂っていた香水に眠くなる成分か何かが含まれていたのだろう。

もちろん、しきりでくくられた運転席にはその効果が届かないように。

「こちらでございます」

運転手は何食わぬ顔をして、いくぶんか離れた場所にある洋館を示した。さびれた印象をうかがわせるレンガの色からして、どうやら最近作られたものではないらしい。つまり、おれを招くために作られたものではなく、もとからあったものだということだ。

コンクリートではなく、砂利におおわれた駐車場には、おれが乗っていたリムジンのほかに全く同じ型の車が4台、広い感覚をとって停められていた。

いずれも無人だ。おれ以外にも幻夢館とやらに招待された人がいるのかもしれない。それはそれで面白そうだ。ゲームは1人でやっても面白くない。

運転手に導かれるまま、数分ほど山道を歩いていく。そこにもコンクリートで舗装された道路などはなく、好き放題に枯葉や枝が散乱していた。ガードレールも設置されていない道のすぐ向こうは崖のように切り立っていて、もし足を踏み外したら発見されるかどうか怪しいものだ。

クマやシカがどこから飛び出てきても不思議ではないくらい、自然がりのままの姿で残っているところを見ると、だいぶ山奥につれてこられたらしい。

秋には紅葉が山を彩り、さぞかしきれいなことだろう。

電柱はあるものの、外灯は1本も立っていない。夜になったら懐中電灯があつたとしても歩くのは危険だ。おれはそうならないことを祈りながら、5分ほどの道のりを歩いた。

幻夢館は近づくほどにその存在感を増し、同時に不気味さも3割増しくらいになった。

獅子をかたどった呼び鈴を鳴らすと、中から運転手と変わらぬ人形のような執事が出てきて、深々とお辞儀をした。コスプレでもしているかのように見事な白ひげと、片メガネが完璧な執事を演出している。彼が外国人なら、セバスチャンと呼ぶのがふさわしいだろう。

「ようこそいらっしやいました。長旅でお疲れでしょう、さっそくお部屋にご案内いたします」

「ありがとうございます」

「では、こちらへ」

後ろで外界と隔壁するには充分すぎる厚みの扉が閉まり、運転手は姿を消した。本当におれを運ぶためだけに雇われた人だった。この幻夢館と同じくらい、殺伐とした雰囲気を伴っている。なんというか、人間らしさが無いのだ。

豪華な内装はたしかに調和がとれていて、付け入る隙もないくらい完璧に整えられている。

入り口の正面には例によってピエールらしき巨大な肖像画が飾られており、内装全体をにらみつけているみたい。さらにらせん状で、二股に分かれている階段の先は各部屋につながっているようだ。

セバスチャンとおれは荷物も持たずに階段を上り、右手側にある部屋に入った。

招待状には、必要最低限のものは向こうで用意すると記されていた。

だからおれはなんの支度もせずにやってきたわけなのだが、手ぶらだと何かむなしいような気分になる。

服を着ていないような、スースーするような感じ。

「何か御用や不都合がございましたら、こちらの呼び鈴を押していただければすぐにまいります。夕食はそちらにある時計で8時となっておりますので、その時刻になりましたら下にある食間までいらしてください。――あと」

セバスチャンはウールのハンカチを取り出すと、おれの時計をよこすように指示した。

おれは少しだけ抵抗をすることにする。

「そうしなければいけない理由でも？」

「主人はゲームをする際にフェアな状況でありたいと申しております。ですから、ゲームに関係のない物はなるべく預かるようにと」

「それで、そのゲームとやらはいつから始まるんだ？　それまではもっていても問題ないだろう？」

「それはわかりかねます。ですが、主人のことづけですので」

「ピエール？」

「さようでございます」

セバスチャンはそれから、こう付け加えた。

「そう言えば、主人は申ししておりました。新堂さまがいらしたら、郷に入っては郷に従え、と伝えておくようにと」

ピエールの得意げな顔が思い浮かぶ。

これは一本とられたものだ。あの時の言葉があだになるうとは。

仕方なくGショックの電波時計を預けると、セバスチャンは丁寧にハンカチでくるんで部屋を出ていった。

純白のシーツの張られたベッドに腰掛けると、ふと家のふかふかのベッドが恋しくなった。遠くはなれた場所に来てしまうと、自分の巣が懐かしくなるのは生物の本能なのかもしれない。

見知らぬ天井は雑菌すら許していないみたいに真っ白で、無機質だった。

「ゲームをしよう」

こんな人里離れた山奥の洋館にまで招待したのだから、まさかWiiで遊ぼうなんていう魂胆ではあるまい。おれは負けたことないけど。

もしかして非合法のカジノなんかが地下に隠されているんじゃないだろうか。

あんまりギャンブルが好きなら、個人的に作ってしまったとか。でも、それだとおれを呼び寄せた理由があまりにも不可解だ。それにピエールは曲がりなりにも紳士であるようだった。彼がギャンブルにハマっているとは想像しにくい。

世界を賭したゲームをしようなんてわけではないだろう。

今の地球を征服するなんてことはまずアメリカの大統領が野放しにしてはおかないだろうし、新型の爆弾を開発したとか、凶悪なウ

イルスをばらまくとかも、映画の中だけで十分だ。

核兵器をつかってでも生き延びている人たちがいるのだ。

そう簡単に地球は滅びないし滅ぼすようなものも作れない。スター・デストロイヤー。

部屋はホテルのスイートルームそのまま、というわけではなくひとり暮らしには少々大きすぎるくらいのものだ。

巨大なベッドには10人くらいを優に寝かせられそうだし、おれ1人だけが独占するのではもったいない。

ニスのきいた木のテーブルの上には油絵のモチーフになりそうなフルーツバスケットが飾られている。あまり実用的なものではなさそうだ。部屋の中央にどっかりと腰を下ろした安楽イスは珍しかったが、しばらく揺られていてもいい考えは出てきそうになかった。そして、壁に埋め込まれたデジタル時計だけが異質さを放っている。

アンティークな雰囲気で統一している部屋だというのに、デジタルの文字盤は生まれる時代を間違ってしまったかのように合っていない。鳩の置時計でもあれば完璧だっただろうに。

それとも、この時計を置かざるを得ない理由があったのだろうか。デジタルにしなければいけなかった重大な理由が。

ほかに、この部屋にはトイレや洗面台、浴室などが完備されていて、食事さえあれば生活できるようになっている。

窓から見えるのはどこまでも広がっている広葉樹の森。そのむこうには、かすむような山脈もある。

おれは部屋のことをひととおり観察し終わると、デジタル時計の時間を確認した。

19・55

もうすぐ食事の時間だ。

おれは赤いじゅうたんの敷き詰められた階段を下り、食堂へと向かった。

リムジンのように長いテーブルには6人分の食事が並んでいる。主人が座る席にはピエールが相変わらず仮面のようなほほ笑みを浮かべてナイフとフォークを握っている。

紅茶をいれたときのように優雅な手つきでレアに焼かれたサーロインステーキを食べているのに、美味しそうな様子を全く見せないのが、不気味だ。

「どうですか、食事のほうは？」

「今まで食べたどんな食事よりもおいしい。とくにこのステーキにかかっているソースは最高ね。隠し味にお酢でも使っているのかしら」

ピエールの隣に座っている女性がじつに楽しそうな表情でほめる。それが普通の人の反応だ。おれだって美味しいものを食べれば幸せな顔になる。

「俺は近所にある700円くらいの大盛りラーメンのほうがいいな。こんな上品すぎる料理は、とてもじゃないが味が薄くて食べた気がしないもんでね」

と、顎の上がった青年がケチをつけた。

痩せた感じの青年に、こてこての脂っぽいラーメンは似合っていない。黒ぶちのメガネを曇らせながらフーフー言って麺をすすっているよりは、今みたいにフランス料理のコースを苦い表情をしながらもしっかり食べているほうが自然だ。

「そういう言いながらも、ちゃんと完食しているじゃないですか。行動は正直ですよ」

ナプキンで口を拭きながら、べつの若者が笑った。

青年よりもうすこし若いくらいだ。いまどきの大学生のようにシヤレこんでいるわけではなく、立っているだけでも感じられる気品を兼ねそなえていて、おまけに顔立ちもいいとくれば、どこかのお坊ちゃんなのだろう。

しかし、甘やかされて育った人によくある自立できていない雰囲気はなく、むしろ頭がよく回りそうな印象を与えていた。

「うるさいな。出されたものは残さず食べるのがマナーってもんだろ」

「たしかにその通りですね」

ふふ、とピエールとは違った微笑を口元に忍ばせ、若者もナイフを置いた。

おれは残しておいたデザート最後のひと口をほおぼると、甘さの抑えられたその食感を気がすむまで味わい、不愉快なピエールの顔を忘れようとした。

「きみの舌は満足させられたようだな。足りないようならデザートのお代わりを持ってこさせようか」

いやなところをついてくる。

はい、と返事をしたいたのは山々だったが、小馬鹿にされるのもくやしくて丁寧に断る。

「子供は子供らしく甘いものを欲しがっていいばいんだよ」

八つ当たり気味に青年が大きすぎる声でつぶやいた。

カルシウムが足りていないんじゃないだろうか。カップになみなみと注がれているダージリンの紅茶にはミルクをたっぷり入れたほうがいい。

おれの悪態とは裏腹に、青年はストレートのまま紅茶を飲むと、今度はピエールに矛先を向けた。

「だいたいあんたも勝手に招待しておいて、携帯の電波も届かないような山奥につれてくるとはこういう魂胆だ。ゲームなんてものに興味はないが、家の前にリムジンなんて停められて居座られたら断りようもない。おまけに途中で眠らせる手の込みようだ」

青年の言うとおりだった。

どうやら単純な馬鹿ではなかったらしい。ピエールは何を基準におれたたちを集めたのだろう、という疑問が鎌首をもたげた。

「携帯電話をつかわれると、外界と連絡することができてしまう。それではフェアなゲームにはならない。私はきみたちに公平な条件でゲームをしてもらいたいものでね、時計などを預かったのもその

ためだ」

「それで？ そのゲームとは具体的に何をするんですかね？」

と、若者が問う。

「その答えは、もうすこし後の楽しみにしておこう。ほかに質問はないかね？」

「なら、ここにいるやつらの素性を教えてくれ。俺以外にも人が呼ばれているなんて聞いてないぞ」

青年が囁みつくように言った。

「あたしだって聞いてないわよ」

と、女性が応じる。

「自己紹介なら、きみたちで勝手にやってくれたまえ。私もきみたちの個人データは把握しているが、赤の他人からプライベートなことを明かされても気分がよくあるまい。……あえてウソをつく、ということも出来るしな」

「そんなことする必要があるのかよ！」

青年の言葉を無視して、ピエールは自分の腕時計を確認した。招待客には時計を外させておいて、自分だけ時計をつけているとは。

「——そろそろ答えが出る頃だろう。きみたちのうちに、誰か体調が悪くなった者はいないかね？」

ガタン、とイスを蹴って立ち上がる音がして、残った最後の1人が口と腹を手でおさえながらすごい勢いで飛び出していった。

今までひと言も発していなかった彼がとった突然の行動に、誰もが啞然としていた。

彼に何が起こったというのだろう。まるで死にそうな顔色だった。

しばらくの静寂の後、若者がおずおずと尋ねる。

「食事に……なにか混ぜたんですね？」

「その通り。だが、安心したまえ。残ったきみたちの分にはなにも混入させてはいない。厨房にあった料理にすこし下剤を混ぜた程度だ、ひと晩もたてば効果はなくなる。厨房にあった料理のひとつに私が適当に薬を入れたただだから、彼はじつに不運だったと言わざ

るをえないがね」

「なにが目的でこんなことを……」

「最初から言っているだろう。ゲームをするためだ。このゲームに真剣に取り組んでもらうためのデモンストレーションだよ」

「だから、なんのゲームなんだよ！」

と青年がヒステリックに叫ぶ。口元を不自然にゆがめたまま、ピエールは静かに宣言した。

「探偵ゲームだよ」

game part 1 (後書き)

続きます。

game part 2

ルールは簡単だ。

第一の事件が近いうちに行われる。その実行犯を特定すること。

それ以外には制限もなく、おれたちは自由に行動することができる。最後の1人になってしまった時点でゲームオーバーだそうだ。それもそのはず、招待客だといわれている5人のなかに偽物がまざっているのだ。だから1人になったら、そいつが犯人ということになる。……でも、このルールには欠点がある。

自分は自分で犯人ではないことを知っているから、2人が残ったときにもう片方を犯人だと宣言すればピエールの言うところの「探偵ゲーム」は終了となるのだ。

はたしてピエールはそれに気づいているのかどうか……。うっかり、ということも考えられなくはない。

ゲームオーバーになる方法は、もうひとつある。

間違った犯人を指摘してしまうこと。片っぱしから犯人の名前をあげていけば、そのうち正解にたどり着く。それではゲームにならないということだ。

ゲームオーバーになったとき、おれたちにどのような結末が用意されているのか、ピエールは説明してくれなかった。

「それでは、君たちはゲームを楽しんでくれたまえ」

ピエールは去り際にそう言い残して、館の奥へと姿を消した。数人の使用人が無表情に食器を片していくさまをぼんやりと眺めながら、おれはつぶやいた。

「……楽しんでるのは、そっちじゃないか」

「事件が起こる――か。まさにクローズドサークル、逃げ道はないってわけだ」

クローズドサークルというのはミステリ用語で、外界との往来がたれてしまった状況のことをさす。たとえば、台風でフェリーが出せなくなってしまうた孤島や、つり橋の落とされた山荘などがそれに当たる。

ミステリーものの定番だから、どこかで1度は見かけたことがある設定だと思う。わざわざこんな手の込んだ舞台を用意するピエールは、よほど暇人なのだろう。

嵐や吹雪があるからこそ成り立つことも多いある意味では密室の状況は、人の手で作り出すのがとても難しい。陸さえあれば人は歩けるのだ。だから、自然災害でもない自由と自由に外へ出られてしまう。ピエールはそれを山奥に連れこむことで解消した。

夜はもちろん、昼間だってずっと山を下ったとしても、ふもとにたどり着けるかわかったものではない。ましてやクマが出てもおかしくないうっそうとした森が広がっているのだ、なんの装備もなく突破するにはリスクが高すぎる。

せめてどのくらいの道のりであったかさえ分かっていたら計画も立てられるというものだが、車に乗っている間は眠らされてしまっていたから、それさえも無理だ。

「ずいぶんと綿密にはめられたみたいじゃねえか」

と青年こと神崎（と自己紹介していた）がため息をつく。

「そうですね。僕もまさか日本でこのようなことができるとは思っていませんでした。ゲームといってもどうせ警察を呼べば危ないこともしなくて済むだろうと。……甘かったですね」

若者——高峰も同じようにため息をついた。

「どうしてこんなことになってしまったんでしょう。あたしはただ、なにか普通のゲームをやるものだとはっきり」

おれたちのなかで唯一の女性である森井さんが泣きそうな声で愚痴をもらす。

みんな不安なのだ。これから起こる「事件」というものがなんなのか。

食事には下剤が盛られていた。あれがもし、腹を下す程度ではすまない毒薬だったら？ トイレに駆け込んだ北条は生きていなかっただろう。

そう思うと、今生きていることが奇跡のようだ。それに幻夢館はピエール個人の所有物であるから、たとえその中で何が起こったとしても外部者はそれを知る由もない。つまり、どんな犯罪だってバレないのである。

「いまさら嘆いたところで始まらないさ。要は俺たちの誰かが犯人とやらなんだ。そいつが事件を起こすまで動きようがないし、いつまでもこうやって話しているわけにもいかないだろう」
口の悪い神崎が肩をすくめてみせる。

そうなのだ。ゲームはまだスタートしていない。そこが恐ろしい。必ず誰かが被害者になる。被害者が出ることによってゲームは始まるのだ。

「……オレは嫌だからな」

みんなの視線が一斉に北条に向けられる。

神経質そうにおびえた目で睨みつけているのも、デモンストレーションの被害者になったためだろう。それでなくとも人とかかわるのが苦手そうな雰囲気がある。

神崎よりも痩せていて、まるでネズミみたいな出っ歯だ。

「犯人はオレじゃない！ ということは、お前たちの中にオレを殺そうとするやつらがいるんだ！ あんなふざけた薬を入れやがって、次は本物を食わせる気なんだろ！」

疑心暗鬼になるのも無理はない、とおれは心中でうなずく。

殺される、という言葉を彼ほど身にしみて感じている人はいない。ましてや自分以外の誰かが犯人になるのだと分かっているれば、距離を置きたくなるのも自然な衝動だ。

どなりつけているせいで息の荒くなった北条は、さらにまくしたてた。

「オレはお前たちと一緒にになるつもりはない。最後まで生き残って

犯人を暴いてやる！ 食事もしらない、部屋にこもっていれば全部が終わるんだ！ 部屋に來たやつは問答無用で殺す！」
たいそうな劍幕だった。

誰もいきりたって部屋を飛び出していく北条を追いかけようとはしなかった。気まずい沈黙だけが取り残される。

このとき、おれはとても嫌な予感を覚えていた。

これが北条の生きている姿を見る、最後になるような気がしていた。なぜかって、推理小説で最初に死ぬのはいつも部屋から飛び出して行ってしまうやつだから。

「……あの馬鹿」

神崎が苦々しげにはきすてる。その横で高峰も困ったような表情をしていた。

「全員で固まっていればむしろ安全だったのに——そういうことでしょう？」

「え？ それってどういうこと？」

唯一、なにも理解できていない森井が若干ヒステリックに叫ぶ。いろいろと神経がすり減っているのかもしれない。そう考えると、ピエールのデモンストレーションはとても大きな役割を果たしていた。ゲームが始まる前に、プレイヤーに恐怖心や懐疑心を植え付けることができたのだから。

みんなが一致団結してしまつては、犯人も手を出すことができない。ピエールはそれを、見事に打ち碎いたのだ。

「もし、僕たち5人がずっとこの部屋に固まっていたとしたら、犯人は手を出すことができません。ほかの4人を同時に始末する手段があるとすれば別ですが、それではピエールの探偵ゲームの趣旨にそぐわないでしょう。彼はどうやら、事件が起こることよりも犯人を当ててもらふことを望んでいるみたいですし」

高峰が笑顔で解説する。

ピエールの目的まで推測するあたり、かなりの洞察力がある。高峰は間違いなくこちらの戦力になりえるし、裏を返せば敵にした場合、

彼ほど厄介な相手もない。

それに神崎も口こそ悪いが、しっかり頭は回っているようだ。少なくとも戦力外というほどではない。むしろ頼りにならないという点では、森井がずば抜けてしまっている。

おそらくピエールはこれを狙っていたのだろうが、森井の神経はあまり丈夫にはできていない。さっきからずっとすすり泣いているばかりだ。

思考能力は残っていない。それどころか、まわりを巻き込んで気を滅入らせるくらいだ。

それに彼女は、いつか突発的に行動を起こしそうな気がしてならない。衝動的な行動を起こして、取り返しのないことになる未来がちらちらと脳裏に浮かんでは消えていた。

「だ、だったら今すぐ北条さんを連れ戻さなきゃ。あたしが無理にでも引っ張って……」

「よく考えてください、森井さん」

優しく諭すように、高峰が言う。まるで子供をあやしているみたいだ。

「彼がいなくなったところで、僕たち残った4人がここに集まっていれば、誰も手だしをすることはできません。僕らのうちの誰かが犯人なら言わずもがな、北条が犯人だったとしても状況は変わりません」

「そいつの言うとおりだ。俺たちは亀のようにじっとしていればいい。まあ、その学生さんやあんたがパニックにならなければ、の話だな」

「おれのこととは心配なさらずに。どうぞ話を進めてください」

「そういう割にはさっきから押し黙っているじゃねえか。怖いんだろ、正直に言えよ？」

挑発するような神崎の口調。

神崎もまた、気が立っているのだ。そうでなければ無意味な内部分裂を引き起こしかねない言動は控えるはずなのだから。

ここで和を乱すのは上策ではないと、神崎は知っている。それでも、落ち着いていられずにはいられないのだ。

「怖くはないですよ。こうして集団でいれば、心配ありませんから」
おれは神崎の挑発をスルーし、むしろのんびりとした口調で答えた。
「それはよかった。君が最年少だからね、精神を保っていただけるのは立派なことだと思うよ」

「高峰さんこそ冷静じゃないですか。まるで経験したことがあるみたいに」

「そんなはずがないじゃないか。普通に生きていたら、クローズドサークルに遭遇することなんてないよ」

高峰は笑って相手にしなかったが、おれの発したメッセージには気づいていただろう。

もしかして、あんたが犯人なんじゃないか、と。

「……そうですね。おれもこんなことは初めてですよ」

と、言ったその時、突然部屋の電気がすべて消えた。豪華なシャンデリアも廊下にすえつけられた蛍光灯も、星の明かりすらも入ってこない。——そういうえば、今日は新月だったか。

こんなところまで計算されていたのかと思うと、ピエールの周到さに悪寒が走った。

「おい、大丈夫か！」

暗闇のなか、神崎が叫んだ。それから、ドアの開く音と、誰かが廊下を駆け抜けていく静かな足音。

停電は意図的なものなのか、それとも偶然の産物なのか……どちらにせよ、視界のない状況は芳しくなかった。

「僕は平気です。新堂くんは？」

「おれも大丈夫です。それより、今の足音が聞こえましたか？」

「たしかに聞こえた。すぐに追いかけたところだが、ここはじつと身を伏せているしかない。ここで襲われる可能性が高いからな、意地でも生き残ってやる」

神崎はいちどそこで言葉を切り、息をのんだような声になった。

「おい……森井さんはどうした？」

「声がしませんね。――嫌な予感がします」

さっきの足音は森井のものだったのだろうか。だとすれば、この隙に北条を狙いに行ったのかもしれない。あるいは、北条がすでに凶行を済ませて部屋に戻っていく足音だったのか。

おれたちの目が届かない間、ブレーカーに細工する時間はたっぷりあったことだろう。

迂闊だった。せめて部屋を出ていないかドアの前で見張っている必要があったのだ。

「くそっ。携帯がないんじゃないライトも付けられねえ。あんたライターはもってないのか？」

「残念ながらタバコは吸わないもので」

「学生の方も……吸うわけないか」

諦めたような声。ブレーカーが戻るまで、おれたちは身動きが取れない状況だった。

おれが不良少年だったらこのもどかしい状況を打破できたのかもしれないと思うと、なんだか複雑な気分だ。たまには道を踏み外していた方がいいのかも。

「とりあえず、俺たち3人はこれで犯人からはずされたわけだ」

「――そうとも限りませんよ」と高峰の声が言う。「この暗闇ですからね、どんなトリックをつかっていてもわからない。僕たちはかなり不利です」

「でも、こうやって話しているんだからそこにいるんだろ？」

「どうでしょうね」

おれが疑問を投げかける。

「隠されたスピーカーとマイクで話している可能性もなくはありません。昨今の技術なら怪しまれずにはなすことも充分に可能でしょう。おまけにピエールは見ての通り大富豪だ。設備に糸目はついていないでしょうね」

「そいつは困ったな」

と、神崎がつぶやいた。

「まあ、現実的ではありませんけどね」

「妥当な線からいって北条か森井が犯人だと断言していいでしょう。僕だってそう信じたい」

と、その時。

使用人の誰かがブレーカーを戻したのか、はたまた自動的に停電になったら復旧するようにできていたのか、目を焼くほどの明かりがついた。

驚いたことに、足元に転がっているのは森井だった。首筋に手を当ててみると、彼女の頸動脈はしっかりと規則正しく鼓動を刻んでいるのがわかった。

とくに目立った外傷もない。たぶん気を失っているだけなのだろう。――それが演技であるのか、それとも本当に気絶しているのか、おれにはわからなかったけど。

「生きてはいるみたいです」

おれが報告するやいなや、高峰と神崎は火が付いたみたいに部屋を飛び出していった。

ぐったりとした森井をベッドに寝かせてから、おれも急いで2人を追いかける。全速力で走っても、北条の部屋は階段を挟んだ反対側にあるので、どうしても時間がかかってしまう。

焦る気持ちを抑えながらやくのことで到着すると、青白い顔をした神崎と高峰が口を押さえながら北条の部屋からでてくるところだった。

「……どうなっていましたか？」

おれの問いに、高峰はゆっくりと首を振ってこたえた。内部の様子を見ておこうと、ドアノブに手をかけたおれを制止する。

「見ないほうがいい。とてもじゃないが、耐えられるような現場じゃない」

「もし今晚、悪夢にうなされたくないんだったらやめておくことだ――俺だって耐えられねえ」

「そうですか……」

よほど凄惨な状況だったのだろう。なかをうかがい知ることはできなかったが、気分悪そうに吐き気をこらえている様子からして、森井やおれに見せないのは妥当な判断だ。

おれはドアから離れると2人に付き添って洗面所に行くことにした。部屋に放置してある森井のことは心配ではあったが、北条が死んでしまった今、犯人は彼女である可能性が高い。まさかいきなり自殺するはずもないから、1人で戻るよりもずっと安全なのだ。

「血みどろだった」

洗面台の蛇口を開きっぱなしにしたまま、高峰は唸るように言葉を吐き出した。清潔なトイレに、嘔吐の酸っぱい刺激臭が漂っている。

「斧か何かで切断したのか——北条は首と胴体が切り離されていたから、僕たちが発見した時には確かめる必要もないくらい壁も、絨毯も彼の血で埋め尽くされていた。——君には見せなくて正解だったよ。下手をすれば立ち直れないくらいだ」

「あれはひどかった。人のすることじゃねえ。……まるで、死神が大鎌振るって北条の首を取っていったみたいだった」

その光景を思い出したのか、神崎がほとんど残っていない胃の中のものを吐き出す。

精神的には高峰も神崎も同じくらい参っているのだ。電車の人身事故を目撃しただけでPTSDに陥ってしまう人もいるくらいなのだから、それよりもっと惨い事件に直面したのなら、平静な心を保っていられるはずがない。

おれはたとえそこで暮らせと言われても平気だろうが、一般人には強すぎる刺激なのだ。

……だが、胸の奥ではどす黒い不安がとぐろを巻いて囁きかけてくる。

「森井に、そんなことができますか？」

「——え？」

「いくら貧弱そうだったとはいえ、北条も大人の男です。それを女

性が簡単に殺害することができるとでしょうか？ 暗闇で不意を突かれたとしても、首と銅を切断できるほどの凶器を森井がもてるものなのでしょうか」

「――そんなこと」

言わないでくれ、とでも言いたげな神崎の様子は哀れだったが、それが演技である可能性も否めない。誰も信じることはできないのだ。ここでボロを出す可能性もある。おれは質問を矢継ぎ早に投げかけた。

「森井はおれのすぐ目の前に倒れていました。停電している最中に、誰にもぶつからず抜け出して、また戻ってこれるものなのでしょうか。反対に神崎さん、あなたは一番ドアの近くにいた。あなたなら気取られずに北条を殺害できるんじゃないですか？ そうでないとしても、高峰さんが犯人である可能性はあります。森井か、北条を犯人だと信じ込ませたいような口ぶりのようにも思えましたから」

「そういうおまえだって疑わしいじゃねえか！　なんでこんなところに子共を呼ぶ必要がある？　油断させといて殺すためじゃねえのか」

神崎がそれ以上触れたら破裂してしまいそうなくらいイライラした口調で問い詰める。

おれは神崎の視線を真っ向からにらみ返す。刺々しい雰囲気、高峰が止めた。

「喧嘩はやめてください。2人とも気が立っているんでしょうけれど、ここで仲間割れを起こしてもしたら相手も思う壺ですよ」

「わかってる！」

神崎は今にもトイレを飛び出して行きたそうなのさぶりだったが、そうも出来ず、血色の悪くなった唇をかみしめていた。

「戻りましょう。森井さんを1人にさせておくわけにもいかないでしょう」

高峰がそう言ったので、おれたちは森井の寝ている部屋へかえることにした。

「……ウソだろ」

神崎の口からもれた言葉が、鉄臭い部屋に重くのしかかった。信じられない光景が、おれたちの前に横たわっていたから。

白いシーツの敷かれていたベッドは血色に染められ、寝ていたはずの森井の胸にはナイフが深々と突き刺されている。

「おれが確認したときはたしかに生きていた。だから、そのあとで殺されたんだと思う。おれたちが北条の様子を見に行っている途中か、トイレにいる間に」

「それと——もうひとつ」

高峰と視線がぶつかる。

「僕たちがいなくなってから、君が来るまでのほんのわずかな時間。ナイフを突き刺すくらいなら一瞬で終わるだろう」

「おれを疑っているんですか」

「それ以外に何が考えられるというんだい？　君が犯人だと仮定するのが自然だろう」

「おれはやっていません」

「これでゲームオーバーだ。このふざけた探偵ゲームはもう終わったんだよ」

高峰が身をひるがえし、ピエールのもとへ行こうとするのを制止する。ここで間違った犯人をあげては、おれたちの負けになってしまう。殺人が平気で起こってしまう幻夢館だ、敗者となったおれたちに未来があるようには思えない。

おれが殺人を犯していないのは明確だ。いまだに犯人はわかっていないが、おれが犯人でないのは事実なのだ。

「なら、おれにチャンス欲しい。身の潔白を証明するチャンスをおれは高峰を睨みつけるように言う。これしか挽回のチャンスはなかった。」

「これから次の事件が起こるまで、おれはずっと部屋に閉じこもっ

ている。もしおれが犯人なら、次の事件は起こらない。だが、おれが犯人でないのなら、事件が起こることによってそれを証明できる。そして、断言しよう。次の殺人は、起こる」

高峰と神崎はお互いに顔を見合わせて困惑した表情をしたが、結局首を縦に振った。

犯人は高峰か神崎だ。

これは間違いない。邪魔ものであるおれがいなくなれば、犯人は必ず事件を起こす。残った1人が自動的に犯人だ。

「……それしかない、か」

被害者が増えてしまうことはなるべく避けたかったが、ゲームに負ければどちらにせよ生きては帰れないだろう。運が良ければ、もう片方の不穏な動きに気付いて抵抗することもできるかもしれない。

高峰も神崎も、勘は鋭い方だ。

おれが犯人に仕立て上げられたのは不覚だったが、そうやってしまった以上どうしようもない。

自室にはそこから鍵がかけられ、内側からは開かないように施されている。これでおれは外から開けられない限り、この部屋にとどまり続けることになる。

犯人がわざわざおれを殺しに来ることはないだろう。

手ごろな標的がいるのだ、面倒な手段をとるはずがない。

だが、『最後の1人になった時点でゲームオーバーだ』とピエールは言っていた。これはつまり、犯人以外の全員が殺されるということだ。最後に残るのは実行犯。

「武器でも作っておくか」

犯人を暴く前に殺されてしまつては元も子もない。役に立ちそうなものはないかとあたりを見回して、執事と呼ぶためのベルが目に入った。これを押せば武器も調達できるのだろうか。

ためしに呼び鈴をチリン、と控えめにならしてみる。

数分後、鍵のかかったドアの向こう側からくぐもった声がした。防音設備がしっかりしているせいで、むこう側の声が聞こえにくいのだ。

「どうかなさいましたか？」

「武器になりそうなものが欲しいんだが、何かないか？」

「呼び鈴の置いてあるテーブルの引き出しに、拳銃があります。それをお使いになられてはいかがでしょうか」

「そんなものがあるのか」

「各部屋には1台ずつ拳銃が置いてありますので」

「これもピエールの指示なのか？」

「さようでございます」

扉越しにも執事がお辞儀をしたんだろうな、とわかる間があって、彼は去っていった。

黒光りする拳銃はずっしりと重かった。小説に出てきた銃は発射される――なんて不吉な1節を思い出す。これをつかうつもりはない。あくまで威嚇用だ。

だが、そんなおれの思惑とは裏腹に弾丸は隙間なく詰められていたし、メンテナンスも怠っていないようだった。安全装置を外し、引き金にかかった指に少し力を込めれば人体を貫く弾丸がよどみなく発射されることだろう。

「……くそつたれ」

なにが探偵ゲームだ。

これではただの殺伐とした殺人ゲームではないか。

……いや、そうではないのかもしれない、と思った。

推理小説なんて、いつも殺伐とした世界なのだ。誰かが死んで、名探偵が解決する。それだけのことだ。

いつ襲われてもいいように銃を握りしめながら、おれはどちらが犯人なのか、考えていた。

おれが森井を介抱したときには彼女は生存していたし、胸にナイフが刺さっているようなこともなかった。ということは、おれが部屋

を出ていった後に森井は殺されたということだ。

だが、神崎も高峰も北条の殺害現場にいたわけだし、森井を発見するまでもずっと行動を共にしていた。つまり、2人に犯行の機会はなかった、ということだ。

——おかしい。

奇妙すぎる。だれも殺人など犯せるはずがないのに、幻夢館では人が死ぬ。

ひよつとすると、ピエールはウソをついているのではないだろうか。犯人は使用人のうちの誰かで、おれたちはみな騙されているということも。

「いや、ない」

ピエールには、そんな七面倒なウソをつく理由がないのだ。

ルールをごまかしたゲームをしたところで、面白くもなんともない手をつかってサッカーの得点を量産したところでも楽しくないのと同じだ。

だったら、なぜ森井は死んだのだろうか。まさか目が覚めてから自分で胸を貫いたとも思えない。そんな薬があったとすれば別だが、都合良く気絶した後に作用するものなのだろうか。あきらかに作作的なタイミングで彼女は殺されていた、と思う。

……頭が痛くなってきた。

どちらにせよ、もうすぐゲームは終わる。おれの勝利で幕はとじられるのだ。

鍵の、開けられる音がした。おれはベッドに寝そべっていた体をむくりとおこし、生き残った者との対面を果たす。予想していたといえど、拳銃を片手に立っていた高峰の姿を見て、おれは多少の驚きを覚えていた。

とても人を殺せるようには思えなかったから。

「どうやった？」

唐突に高峰が口を開いたが、おれには彼の言っていることが理解できなかった。

「どういう意味だ？」

「どうやってここの扉を開けて神崎を殺したのかと聞いているんだ。僕の見たところ、あの施錠は完ぺきで、こじ開けたような痕跡もなかった。幻夢館には扉をつかわずに外へ出られる仕掛けでもあるんだろうね、そうでないと僕の目を盗んで神崎を殺せるはずがない」

「最後まで白々しいことをするもんだ。おれがずっと閉じ込められていたのは事実なんだ、あんたが神崎を殺したに決まっている」

「そうでないから、僕はこうやって君を殺しに来たんだ。あくまで否定するようなら、それはそれでいい。残された選択肢はひとつなんだから」

「……あんたがそのつもりならおれにだって覚悟はある。人殺しに情けをかけるようには甘くないぜ」

「それは僕も同じだよ」

向き合ったふたつの拳銃が、同時に乾いた発砲音を立てて。

迷うことなくその胸を貫いた弾丸は誰かの命を奪うには十分な威力と、残酷さを伴っていた。心臓のあたりに感じた生温かい感触だけが、肉体に強く刻まれた。

game part 2 (後書き)

続きます。

game part 3

『最後の1人になったらゲームオーバー』

誰もいなくなった、血にまみれた幻夢館で微笑をはりつけた男がしずかに呟いた。

彼の周りでは、音も、においも、時さえも止まってしまったみたいに変化がない。まるで棺に封印されたミイラが笑っているかのような声が、人影のないゲーム盤の上に降り注ぐ。

ゲームの駒は、どれも砕けてしまっている。

あたりに散らばった大理石のかけらは、吹くはずもない風をまっぴるかのようだ。

『最後にだれもいなくなったとしたら、ゲームはいつ終わる』

その言葉に反応したのか、チリになったプレイヤーの駒がかすかに動き始める。重力に引かれるようにして、ゆっくりと元の姿に戻っていく。

――そして、ピエールの右手には復元されたナイトの駒が握られていた。それをそっとボードに戻す。

『終わらないゲームは繰り返される。永遠に』
すべてが、元に戻った。

「――到着いたしました」

まだ眠気の残る頭をなんとかふりたたせてリムジンから降りると、なぜだか懐かしい感じのする砂利道と、空車になったリムジンが何台か並んでいた。

夕暮れと車体の色がいびつにまじり、物悲しげな雰囲気を作り出している。

その雰囲気は一面に広がる森にまで及んでいるようで、茜色に染められた木々の葉っぱが風に揺られていることさえも、哀愁に満ちて

いる気がした。

——と、そのとき。

網膜の裏に焼きついた赤い光が夕日と重ねあわさり、強烈なめまいを覚えた。

大地震でも起こったかのように足元がおぼつかない。頭を激しく揺すられているような感覚。おれは耐えきれず、地面に手について崩れ落ちた。

砂と小石の感触が、溶けていくみたいに消えて、生温かい、ねっとりとしたものへと変わる。

なんだ、これは？ おれはどうしたんだ？

「大丈夫ですか」

感情のこもっていない運転手の声がどこか遠くから降ってきているように思えた。冷静に考えれば、おれの頭上でしゃべっているだけなのだが、脳裏から蘇る記憶の濁流に押し流されそうになる状況で、そんなことを判断できるほど目まいは生易しいものではなかった。

赤。

血。

銃。

死。

猛烈に気分が悪い。吐きそうだ。

だが、記憶の淵からよみがえった光景を鮮明に思い出したことで、目まいは徐々に和らいでいった。おれは荒い呼吸を整えながら、ゆっくりと立ち上がり、運転手に微笑みかける。

「もう大丈夫ですから」

「そうですか」

相変わらず人形みたいな受け答えだ。はたして幻夢館にまともな人間はいたのだろうか、ということさえ怪しくなってくる。

「死んだ人間でさえ生き返る。おれみたいに」

聞こえていたのかいないのか、運転手は先行して幻夢館への道を歩き始めた。街灯も標識もない、さびれたのぼり道だ。おれは砂利を

踏みしめる感触を確かめながら、幻夢館への長い道のりを進んだ。
白髪 of 執事はかしこまったようすでおれを館の中へ向かい入れ、また同じ部屋に案内される。

拳銃が隠されてあった机の引き出しを調べると、予想にたがわずそこにはずっしりと重い凶器が置かれていた。これがおれと高峰の命を奪ったのだ。

「いちおう、持っていくか」

今度はつかうことがないように祈りながら、おれは拳銃をジーンズのベルトに挟みこんだ。

壁に取り付けられたデジタル時計が8時を刻むのを確認して、食事をとるために階下へと足を踏み入れた。

「ゲームをしよう」

と、ピエールが言う。

レアのサーロインステーキを味わい、食後の紅茶を楽しんでいるときに。

「探偵ゲームだろ」

と、おれは言う。

まだ元気そうな顔をしている北条も、森井も、高峰も、神崎も、びっくりした表情でおれに視線を集めた。どうやら何も覚えてはいないらしい。だが、きつとすぐに思い出すことだろう。これから始める、事件のなぞ解きを聞いていれば、いやでも記憶の底から浮かび上がってくる。

「そのとおりだ。これから起こる事件の実行犯を特定することが目的のゲーム。プレイヤーが1人になった時点でゲームオーバー、私の勝ちだ。反対に途中で犯人を指名できたのなら、君たちの勝利となる。きわめてシンプルで、美しいルールだ」

酔いしれているかのようなピエールの口調。食事にはワインも、食前酒も用意されていなかったというのに。推理小説は犯人が分かることによって完結する。皆殺しにされておしまいになる結末なんて、名探偵にはふさわしくない。

「探偵ゲーム？ そんなことのために俺を呼んだっていうのかよ。くだらない」

さっそく神崎がピエールに食ってかかる。

当の本人は氣にとめた様子もなく、まっすぐにおれと視線をぶついている。無視されたことに氣を悪くしたのか、神崎はバン、とテールをたたきつけた。

「おい！ 返事くらいしたらどうなんだ！」

「神崎さん、あなたはそうやってトラブルを生じさせるための駒だった。冷静ではあるが、口が悪く、常にけんか腰なあなたをピエールが選んだのは、大正解だったと言わざるをえません。残念なことですが」

「ああ！？ どういう意味だよそれは！」

吠えるようにして神崎は立ち上がり、釣り上った眼で睨みつける。初対面だと思っていた人に分析をされて、しかもゲームの駒にされたなどとはよく理解はできないが馬鹿にされている風なニュアンスで評価されれば、氣分を悪くするのも当たり前だ。

この場ですべてをわかっているのはおれとピエールだけだ。

はやくボードの上まで戻ってこい。

「あなたが挑発をすることによって、ある人が自然に行動することができたんですよ。もともとピエールが小細工を施してはいましたが……、疑われないようにするためにはもうひと工夫、保険としてほしかったんでしょう。早々にゲームが終わってしまっただけは興ざめですからね」

「あなた、何を言っているの」

森井が座ったまま横やりを挟む。そう、彼女の性格は虚偽で満ちているのだ。

「森井さん、あなたに課せられた役割はタイムラグを作り出すこと。氣絶している、という無防備な状態が絶対に必要だったんですよ。騒がれでもしたら致命的ですからね。ひょっとして、心臓の疾患を患っていたりしませんか？」

「……なんでそんなことまで知ってるのよ」

「最後に高峰さん。あなたはおれと同じく最後まで残る人間だった。残った二人で殺しあうための駒だったんですよ」

「……………」

押し黙る高峰。

巖かだが、舞台は整った。

「さて――」

「これは実に緻密な計画によって遂行された事件でした。まるで詰将棋を解くみたいにおれたちは集められ、配置され、ピエールの手の上で踊らざるを得なかった。最初に気付けなかったのは不覚でした。それだけ仕組まれた心理トリックは巧妙であり、この幻夢館に仕組まれたゲームの部品になってしまいうように計算されていたのです」

おれはここで、言葉を切り、テーブルについている5人の顔を見回す。

難しい表情をしたもの、無表情のもの、わけもわからずあっけにとられているもの、しかめっ面をしたもの、――そして、微笑を絶やさぬもの。

滝つぼに落ちるようにして思い出した記憶とともに、おれは犯人のとった行動を手取るように明確に知っていた。名探偵のように証拠をたどり、方程式を解くみたいに事件の全貌を把握したわけではないのだ。

たぶん、おれは直観的にも天才なのだ。

「ゲームの下準備は、厳密に言えば人選のときから始まっていたといえますが、それは先ほど説明した通りです。ピエールの計画したプランに沿うような人間を、わざわざ調査して集めたのでしょうか。ご苦労なことです」

手間暇のかかったプランだ。金持ちのやることはよくわからない。

才能があるから金が集まる、金があるから時間ができる、時間があるから才能をつかう。だが、その方向性を間違えてしまつては、恐ろしいことにもなりかねない。世界を滅ぼしそうになるのはいつだって天才科学者や天才スパイなのだ。

「ここ、幻夢館に来るまでも、帰路をわからなくすることによって逃げられなくなしたり、見知らぬ人間を集めることで必要以上の不信任をつくりだしたり……と、じつに手の込んだ仕掛けを施しています。まあ、いわばこれは食前酒アペリティフのようなものです。快適に食事を楽しむための、ささやかな、ね」

コース料理は、文字通り宴の始まりによって開演する。

「本番はこれからです。北条の料理に下剤を入れ、トイレに駆け込むという悪趣味なデモンストレーションによって、ゲームはスタートしました。いわば全ての駒が配置された状態です」

「——そうか、思い出した！」

高峰が感嘆の声をあげる。神崎と森井はその様子を首をかしげながら見ていた。

「僕は、最後に君と撃ちあって……そして、死んだんだ。残ったのは僕と君だけだったから、迷いなく犯人は君だと断言した……のは間違いだったんだね？」

「はい。おれは神崎さんが殺害されたとき、たしかに部屋の中にとじこめられていましたから」

「それなら、一体誰が？」

「死んだはずの人間がよみがえった——そういうことです」

おれはそこで言葉を切り、深く呼吸をした。

「北条さんが出ていってから、最初の停電があるまでにはかなり時間がありました。その間おれたちはひとまとめになって動こうとしなかった。それが一番安全だと思えたから。しかし、同時に犯人にとっても最も安全な状況だったんです。誰も動かない——つまり、見つける危険性がないということでしたから」

「そうか……だから……」

神崎も記憶を取り戻したようで、顎に手を当てながら考え込んでいる。筋道だてて考えれば、見えてくる道は必然的に1本に絞られるのだ。

「幻夢館をご覧になってもわかるように、ここの主人はどうやら相当の富豪であるようです。蠟人形何かを、死体に偽装するくらい、わけもないはずだ。血まみれになった遺体の生死を確認するような人はまずいませんからね。素人ならなおさらです」

「北条は首が離れていたから——死んでいることを疑うなんて思いもしなかった」

高峰が唸るように言う。普通なら、近づくことさえもためらうはずだ。その後、トイレで吐いていたことも含めてまともな思考を奪う効果もあったことだろう。

おれは続ける。

「北条はおれたちが偽物の死体を見に行っている間、完全にノーマークでした。隠れていた場所から悠々と出てきて、気絶している森井さんをナイフでひと突き、というわけです。こんなことは赤子の手をひねるよりもたやすくできたでしょうね」

「あたしは、昔から心臓が弱いから……」

「携帯や電波式の時計を没収したのも、念には念を入れてのことでしょう。わずかな誤差でさえ、計画を破たんさせる可能性がありますからね」

壁にはめ込まれたデジタル時計には電波を無暗に発信させる心配がない。さすがにやりすぎだとは思いますが、塵ほどの不安要素もピエールには不満だったのだろう。完璧主義な人間が好みそうなことだ。

「おれを疑うしかない状況で、仲間割れが起こるのは仕方のないことでした。誰もこの時には真相に気付いていませんでしたから、まさか死んだはずの人間がのうのと動きまわっているとは想像もしませんしね。そして最後は——」

「完全に油断していた俺が殺されて……」

「僕ときみがお互いに殺しあって、ジ・エンドというわけか」

「その通りです。そうですね、北条さん？」

真っ先に衝撃的な方法で舞台から消えることによって、犯人の候補からいちはやく抜け出した犯人は、唇をかみしめてピエールの方を顧みた。

幻夢館の主人はゆっくりと口を開く。

「お決まりなセリフだが、証拠はあるのかね？　証拠がなければどんな名推理もただの妄想でしかない」

「ありますよ、それなら」

おれはカップになみなみと注がれている紅茶を飲み干す。もちろん、ミルクと砂糖をたっぷり入れたものだ。甘い風味が口いっぱいに広がって、つかの間、幸せな気分になった。

「北条さん、あなたトイレに行きたくはありませんか？」

「そんなこと……」

と言いかけて、しまったという表情をする。あわててピエールに助けを請うような視線を送るが、高々と笑うだけで取り繕うとする気はないみたいだ。

「リアリティを求めるなら、下剤を混ぜておくべきでした。ですが、それだとその後の行動に支障が出かねない。下痢になって殺し損ねた、なんてのは笑いごとになりませんか」

ピエールの笑い声がさらに大きくなった。薄気味悪い微笑はどこかへふきとび、心から楽しそうな声をあげている。

幻夢館に満ちていたおどろおどろしい雰囲気もその声にはじき出されたかのように、気が付けば肩にかかっていた重圧も消えていた。

「お見事だよ、名探偵。それでこそわざわざこんな山奥に館を立てたかいがあったというものだ。私の用意した謎を、こうも美しく解明されることが快感だとは。なんと気持ちのいいことか」

「犯人には、心のどこかで自分のトリックを暴いてほしいという願望がある。倒したドミノをほめてもらうように、自分の考え出したトリックを称賛してほしいんです」

ですが……、と言って、おれはピエールを睨みつける。

「そのために殺人を起こしてしまうのは、あまりにも非人道的です。これは華麗なストーリーでもなんでもない、ただの快樂殺人だ。あなたはたんに人殺しになり下がっただけなんですよ。推理小説のなしを現実世界に持ち出してはいけない、それは明らかなことです。なのにあなたはそんなことさえも失念していた。だからこそこんな恐ろしい事件が起こってしまったんです」

「フィクションと現実の違いなんて、どこにあるというんだ？ 現実がフィクションを作り出したのなら、フィクションもまた現実を作り出すことができる。そこに境界なんてない。現実是非現実であり、非現実が現実だ」

スイッチを入れたように語り始めるピエールを、誰も制止することはできなかった。熱っぽい演説は不思議な音色に包まれているみたいで、段々と食間の風景が歪んでくる。本当に現実とそのほかの境がなくなってしまったような錯覚に陥る。

「なにが赤い夢で、なにが妄想で、なにが本当のことなのか。誰にとつてのリアルで誰にとつてのウソなのか。きみたちにわかるといふのかね？」

そこで、意識が途絶えた。

『始まらないゲームは終わらない』

その言葉が聞こえたとき、おれはリムジンの中にいた。

game part 3 (後書き)

これでおしまいです。

最後までお付き合いいただき、本当にありがとうございました。
作者の自己満足のような作品になってしまった気がしますが、少しでも読者の皆様に楽しんでいただければ幸いです。

推理物というのは、あまり書いたことがないのですが（昔落書き程度にかいたくらいです）、やはりいざ書いてみると難しいですね。
トリックやなんかはパツと思いついたものをとりあえず入れてみた、という感じで……変な点なんかはないと思うんですけど、高確率で紛れ込んでいるはずですので、どうかご指摘ください。

また、この作品を書くにあたってはやみねかおるさんの「機巧館のかぞえ唄」と最近話題の「インシテミル」を参考にさせていただきました。

どちらもとても面白い作品なので、ぜひ読んでみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6293m/>

厨式王國（ラス・キングダム）

2010年11月27日10時19分発行